魔王って何ですか？

一咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王って何ですか？

【Ｎコード】
Ｎ５５４６Ｈ

【作者名】
一咲

【あらすじ】
異世界に召喚された少年は渋々ながらも魔王になり、周りの仲間たちとなんやかんやするお話。

その１：走る少年と少女

「お願いします、魔王様になって下さい！！」
「断る！　何で魔王にならないといけないんだ！？　俺は今まで通りに平穏に生きていきたいんだ！！」

広い廊下を走りながらの会話。
逃げる少年、追う少女。逃げている少年は学ランを着ていて爆走している。追いかけている少女はメイド服を着ていてやはり爆走している。

「お願いします、これでは何の為に召喚したのか分からなくなります」
「んなもんしるか！　そっちが勝手に召喚したんだろうが！　俺は元の世界にぜってー帰るからな！」

どうやら少年は異世界に召喚された模様。ついでに召喚された理由が魔王になる為らしい。
異世界から魔王にする為に召喚される人達からすると厄介事以外の何物でもない傍迷惑な理由である。

「無理です。この世界は他の世界から入ることは出来ますが、出ることは出来ないんです」
「だったら最初から喚ぶなっ！！　それに俺は何がなんでも、どんなことをしても必ず帰るんだよ！！」

角を右に曲がる二人。
特に人影は無く、二人とも誰かにもぶつかるという事は無かった。

「だから無理なんですって。いい加減諦めて魔王様になって下さいよ！　代わりにわたしのことを好きにして良いですから。わたしはあなたの忠実な僕なんですから大丈夫です」
「ウルセー！！　帰るったら帰るんだ！　……ちっ！」

行く先には壁のみが視界に映った。要するに行き止まり。
足を止め、振り返る少年。

「もう逃げられませんよ。さぁ、魔王様になりましょう！」

笑顔で近づいてくるメイドさん。
だが、ここは5人横に並んで歩いてもまだ余裕がありそうな程の広さがある廊下である。

「ふん、誰が諦めるか」

少年は駆け出し、メイドさんの脇を通り過ぎようとした。
だが、メイドさんは右手を動かし、何かをして少年の行動の邪魔を開始する。

「あらあら、無駄ですよ？　“バインドグラビティ”」
「ぐっ！！」

少年の周りの重力がいきなり強くなり、まともに立つことが苦しくなっていく。
少年はメイドさんの魔法により、床に這いつくばざるをえなくなった。

「もう諦めて下さい」

少年がどれだけ全身に力を籠めても立ち上がるどころか、体を持ち上げることすら出来なかった。
メイドさんは少年の顔を覗き込む為に目の前にしゃがんだ。その結果、少年はあるモノを見た。

「……ふ～ん、ピンクの縞々か。可愛くて似合ってるな」
「本当ですか？　有難う御座います」

メイドさんはニコニコしたまま何ら動きを見せない。
少年は焦った。何故なら下着の色を言ってメイドさんを怒らせようと考えていたからだ。メイドさんが怒れば体を押さえつけている“バインドグラビティ”なる魔法が解けると思ったからだ。だが、その思惑は外れ、少年は未だに動けないままだった。

「わたしを怒らせようとしたんですよね？　でも残念でした。わたしはあなたになら下着を見られても平気なんです」

メイドさんはやはりニコニコしたままだった。
その笑顔にはなにも含まれておらず、ただただ少年へと満面の笑みが向けられているだけだった。

「信じてもらえないと思いますが、わたしはあなたを好きになったんです。ですからあなたに見られても平気なんです。他の人なら記憶が消えるか死ぬ一歩手前まで殴り続けますが」

ニコニコしていた顔が優しく穏やかな笑顔に変わったのを見て、少年は漸(ようや)く諦めた。
それと同時に全身に力を籠めることも遂に止めてしまった。

「……なぁ、魔法解いてくれないか？」

「え？」
「逃げないからさ。解いてくれないか？　しんどいんだ」
少年は諦めを含んだ笑みで懇願した。
流石に結構な距離を全力疾走をして力を全身に籠め続けていた少年に力は余り残っていなかった。
「分かりました」
その言葉と共に少年を押さえつけていた力は感じられなくなった。
ゆったりと、いやのっそりの方が合いそうな感じで立ち上がる。
「……魔王になればいいんだよな？」
肩を回したり腕を何度か振ったり足を上げ下げしたりして体を調べる。
特に体に異常がないと判った少年は渋々、という様子でメイドさんに確認した。
「はい。有難う御座います、魔王様」
メイドさんのとびっきりの笑顔を見て、少年は色々なことを諦めて魔王になることにした。
そして少年はこう思った。
俺は今日から魔王になるのか……。ところで魔王って何ですか？

その2：自重しろ、俺

「さて、どうしたものか……」

魔王になったのはいいとして――本当は嫌だが――、具体的に何をするのか分からない。

国の為、民の為に政治をするわけではないし、特にやることがないのだ。

「……次にティアに会った時に聞くか」

ティアは俺を追いかけていたメイドさんだ。

因みに俺の名前は月闇静夜（つくやみせいや）だ。『月の闇に静かな夜』って意味でつけられた名前だ。まぁ、月闇は先祖から代々伝わっている名字だけどな。俺の名前の由来なんてどうでもいいか。

コンコン

ん？　誰か来たみたいだな。

「入っていいぞ」

「失礼します」

俺専属のメイドさん、ティアが入ってきた。

ふむ。やはり何度見てもティアは可愛いな。くりっとした大きな瞳、柔らかそうな唇、腰まである綺麗な金色の髪は左右で縛ってあり、年頃の少年達には目の毒であろう大きな胸、そしてその胸を強調するかのような細い腰。平均的な身長の割にそのあどけなさが残る顔とそれに反する巨乳は反則だと思います、先生。

「わたしがどうかしましたか？」
「い、いや、何でもないぞ！」
「？　そうですか」

危ねー危ねー。変態さんの如く見るのはヤバイだろ、俺。もう少し自重しろ。

「で、どうしたんだ？」

話を戻す。

「そろそろ食事の時間なのでお呼びに参りました」

飯か……そういえば腹が減ってるな。

「そうか、なら行くか」
「はい。では、わたしについて来て下さい」

ティアの言うことに素直に従い、食堂まで行く。
中に入る前から、賑かな雰囲気が感じられた。

「お、ティア。その後ろのヤツが新しい魔王様か？」

燃えるように紅いポニーテールの女の子がティアに話しかけた。
ふむ。この世界の女の子は皆美少女なんだな。キリッとした瞳からは強い意志が感じられる。そして顔は綺麗と可愛いが一緒に存在し、ティアとは違う魅力に溢れている。体もモデルの様にスラッとしている。胸はティアよりは小さいが、それでも平均的なサイズより大きい。

って俺は何をやってるんだ！？　さっき自重しろって自分に言い聞かせたとこだろ！？　俺のバカヤローッ！！

「どうかしましたか？　魔王様」

頭を抱え、一人悶えている俺に問いかけるティア。

「……そいつが魔王様でいいのか？」

変なものを見る目で俺を見ながら不安を覚える紅ポニーさん。

これからはちゃんと自重するのでそんな目で見ないで下さい。そして魔王として頑張るので応援……いや、力を貸して下さい。お願いします。

心の中で盛大に謝りながらも、助力を請う。

「何でもない、大丈夫だ。それより飯にしよう」

今の俺ができる最大の話題転換。……自分でも無理があるって解ってるよ。

「分かりました。ではこちらです」

ティアはクスクスと小さく笑いながら席へ案内してくれた。

その後俺はティアとリファ（紅ポニーさん）の三人で飯を食った。なかなか美味かった。

あ！　何をしたらいいのか聞くの忘れてた。……まぁ後で聞くか。

その３：別れの言葉と妹の出現

「なぁティア。魔王って何をしたらいいんだ？」

食後、俺にあてがわれた部屋――魔王が使用する部屋――に戻った後、コーヒーを淹れているティアに聞いてみた。

「特に何もありませんよ。人間を攻撃する必要も世界を支配する必要もありませんし」

する事が何もないだと？

「じゃあ何故俺を召喚したんだ？　何もすることのない、お飾り魔王として召喚されるのは我慢ならんのだが？」

言葉に怒気を含めて問いただす。

「すみません。ですがこの世界には魔王様が必要なんです」

心の底から申し訳なさそうに謝るティアを見て、興が削がれた。

「……はぁ。……わかったよ、もう召喚されたことについては何も言わないよ」

……全く。あ～あ、あと数日であのマンガの最新刊が出たのにな～。

それに光と出掛ける予定があったのに……。そういえば家族への別れの言葉を言ってなかったな。

父さん、母さん、俺は異世界で魔王として生きていきます。俺は元気なので、何も心配しないで下さい。あと、光のことを頼みます。

超絶ブラコンの光は俺が居なくなったことで暴れると思いますが、その時は俺の部屋からYシャツを持ち出して与えてください。そうすれば落ち着くと思います。それでも落ち着かなければ俺の下着を与えてください。アイツは知られていないと思い込んでいますが、俺の下着の匂いを嗅いで嬉しそうにしているのを、俺は知っています。それでも止まらない場合は俺の部屋に放り込んで下さい。そうすれば俺の部屋は散らかるが、光は完全に落ち着きます。何ならそのまま俺の部屋で生活させてあげてください。その方が光も悦びます。

光が変態みたいに思うと思いますが、それは深すぎる愛ゆえの行動なので赦してあげてください。俺以外の人には迷惑は決して掛かりませんので。そして、どんなに変態な光でも俺にとっては可愛い妹なんです。

べ、別に俺は光を愛してなんかないんだからねっ！！

いやマジで、家族としての好きだから。

か、勘違いしないでよねっ！！

最後に光。ゴメンな、約束守れなくて。お前は約束したその日から日曜を凄く楽しそうに待ってたのに。こんなダメダメな兄ちゃんを好きでいてくれてありがとうな。俺は光のことは絶対一生忘れないから。これが俺ができる最後のことだから。お前は俺のことを忘れて幸せになってくれ。

コンコン

俺が届かないと分かっていながらも家族への別れの言葉を送っていると、誰かが来たようだ。

「入っていいぞ」

ドアが開き、一つの影が勢いよく入ってきた。

「お兄ちゃ～ん！！」

入ってきた影は光で、俺に抱きついてきた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん！　あぁ、お兄ちゃんの匂いだ～」

俺にしがみつき思う存分匂いを嗅ぎ、えへへ～、と笑う光。

うん、やっぱり変態だな。流石超絶ブラコンの称号を持つ妹。俺が受け止めるしかないんだな。愛を受け止めるんじゃないぞ？　行動だけだからな。いくらなんでも血の繋がった妹の愛を受け止めることなんて出来ねぇよ。

「ティア、コーヒーをくれ」

光の頭を撫でつつ、コーヒーを要求する。

「あ、あの、魔王様？」

ティアは困惑した表情でおそるおそる訊ねてきた。

「コイツは俺の妹。名前は光。超絶ブラコンでいつもこんな感じだ。気にするな」

「そうなんですか。分かりました」

未だに匂いを嗅ぎ続ける妹を無視してティアとの会話を楽しんだ。

そういえば何故光はここにいるんだ？

俺の中で新たに疑問が一つ増えた。

その４：疑問の解消

「なぁティア。何故光が此処(ここ)に居るんだ？」

俺にしがみつき、匂いを嗅いでハァハァしている光を無視する。

朝っぱらから発情すんなよ、このド変態ブラコンが。

「多分、ですが。魔王様が召喚されたときに、魔王様の居た場所に転送用の魔力が少し残っていて、それに触れたから此方(こちら)に来たのだと思います」

ということは、このブラコンは俺のあとを追い掛けていて、俺がいきなり消えたからその原因を探るために触れてしまった。ってことか。

「なぁティア。俺さ、今初めて疑問に思ったんだけど、何故俺が魔王なんだ？」

なんで今まで疑問に思わなかったんだろう？　マンガとかなら真っ先に聞くことなのに。

「それは、魔王様が魔王様になるに相応(ふさわ)しい魔力を持っているからです。魔力の質、量共に素晴らしい数値を示しましたし」

「俺は魔力なんて持ってないんだが？　……いや、元の世界に魔法なんてないんだが？」

「それは関係ありません。魔力は体の中に在るものですから。世界の魔法の有無はどうでもいいんです」

ふむ。それなら納得できなくはないな。

「じゃあ俺の魔力の質と量を教えてくれないか？数値化しているんだろ？」
「はい。魔王様の魔力の質は１０、量は１０，０００です。質は十段階で区切られていて、量は成人の平均は１００前後です」
おぉ！　なんという主人公補正。ＩＮＴとＭＰが異常だぜ。……他のステータスは知らないが。でも、身体能力が上がった気は全く無いからＳＴＲとＶＩＴ、ＤＥＸそれにＡＧＩは変わってないと思う。ＭＥＮは本当に判らないな。ＩＮＴが上がってるからＭＥＮも上がってても可笑しくないし、でもＳＴＲとかは上がってないからＭＥＮも上がってないかもしれない。
今現在のステータスは

月闇静夜
Ｌｖ１６（＝年齢）

ＨＰ：１４９（１５０）
ＭＰ：５８２（１００）

ＳＴＲ：７０（７２）
ＶＩＴ：５６（６３）
ＩＮＴ：１８２（６４）
ＭＥＮ：？？（６３）
ＤＥＸ：６０（６２）
ＡＧＩ：６５（６２）

こんな感じ？　因みに（）内は平均値な。

多分広範囲攻撃魔法を覚えてると思うから無双できるぞ。ボスも

雑魚同然に蹴散らしてくれるな。「見ろ。人がゴミのようだ」と言いながらプレイするのをお薦めするゾ。

さて、二つの疑問が解消したわけだが……やることないんだよな、魔王って。

ん？　そういえばやることないのに何故魔王がいるんだ？

俺はその疑問をティアに聞いてみた。

「それについては分かりません。昔から魔王様がいて、お亡くなりになられると新しい魔王様をまつりあげていましたので……」

でも魔王様が必要なんです。と続いた。

まぁ、とりあえずは元の世界に戻る方法を探すってことを方針に頑張りますか。

その5：あぁ、いいにほい

とりあえずは元の世界に戻る方法を探すってことを方針に頑張りますか。

さてはてこんなことを言ったのは誰だったっけ？

「お兄ちゃんだよ」

五月蝿い、今はモノローグっぽい雰囲気を醸し出しているところなんだぞ。邪魔をするな、妹よ。

……え～と、あれ？　何処まで話してたっけ？ほら光、お前のせいで忘れただろ！？　どうしてくれんだよ！？　あぁー、もういいや面倒臭ぇ。

城の書庫にある文献を全部読んだが、何一つ手掛かりがなかった。ド畜生が。

しかも勇者が城に近付いてきているらしい。ざけんなよ。

絶望だね。この世の中には失望したよ。帰る方法がない、勇者は攻めてくる。ダルいっての。

「お兄ちゃんの匂いだ～」

ええい！　離れろ！　ベッドの上に昨日着ていた服があるからそれでも嗅いでろ。

「やだ！　お兄ちゃんの匂いはリアルタイムで嗅ぐと威力が2倍になるの！」

威力ってなんだよ、威力って。

「お兄ちゃんの匂いを嗅ぐとＨＰゲージが一気に減って赤くなるの」

それはお前だけだ。

「じゃあ試してみる？　ティアさん、お兄ちゃんの匂いを嗅いでみてください」

いきなりティアに振る光。

あまりの無茶振りに注いでいたコーヒーを溢（こぼ）してしまったティア。

「わ、わたしですか？」

別にやんなくていいぞ、ティア。光の戯れ言はスルーがデフォルトだ。

「では、失礼して……」

っておいっ！？　嗅ぐんかい！？

「……」

あ、あの～……ティアさん？　何か言ってくれませんか？　ちょっ！　段々登ってくるな！！　てか光もさっさと離れろ！

「あ、ここ、凄く良い匂いがします」

やめて、そんなとこ嗅ぐな。息が、吐息が鎖骨の周辺に掛かって

擽(くすぐ)ったいから。やめて、ちょっ！　マジでやめて、やめ……やめろって言ってんのが聞こえねぇのか！？　……え？　マジで聞こえてないの？　え？　全くやめる気配が無いのは聞こえてないからだよね？

「凄いです。魔王様のココ、良い匂いです。あぁ、もうわたしはこの匂いがないと生きていけない体になりました」

はぁっ！？　何言ってんだよ、ティア！？　どうしたんだよ？お前も光みたいにならないでくれよ。俺の癒しだったのに。匂いフェチは一人でも十分なんだよ！　目を覚ませ、ティア！！

ガチャッ

「……お楽しみ中？」

ノックもなしに入ってきたのはリファだった。

違うっ！　断じて俺は認めない！　光とティアにとってはお楽しみかもしれないが、俺にとっては全然お楽しみじゃねぇっ！！　つーか寧(むし)ろ助けて！　光とティアを引き剥がしてくれ！　頼む、リファ！

「しょうがないな…」

やれやれ、と頭を一度掻き、面倒臭そうな顔をしながらも引き剥がしてくれた。

助かった。ありがとな、リファ。

「さて、報酬として…」

ススと近付いてきたかと思えばいきなり抱きついてきた。

何してるんだよ、リファ！？

「いや、ね。二人がずっと嗅いでたからちょっと気になっちゃって。すぐやめるから」

すぐなら、と油断したのが失敗でした。リファも他の二人と同様にずっと嗅ぎ続けていた。

もうヤダ。誰か助けて。

俺の願いは叶わなかった。あぁ無念。

その６：勇者？なにそれ？おいしいの？

「魔王は何処だー！！」

五月蝿いな。どれだけ大きな声を出すんだよ？下の階からなのに普通に聞こえてくる。ウゼー。

「なぁティア。下の階のセミを連れてきてくれないか？」

「分かりました。では、玉座までご案内してきます」

「頼んだ」

ティアは一度俺にお辞儀をしてから部屋をあとにした。

さて、俺は玉座に行きますか。

「お兄ちゃん待って～」

光の存在を綺麗に忘れてたな。

「光は此処にいろ。今変な奴が城に来てるから」

「やだ！お兄ちゃんの傍にいるの！」

やれやれ、困ったお嬢ちゃんだ……

「俺は光を心配してるんだ。変な奴が光を襲うかもしれないからな。ソイツが強かったら俺は光を助けられないかもしれない。だから分かってくれ。俺は光が心配なんだ」

嘘だけどな。光は邪魔なんだよね。ずっと引っ付かれてると動きにくいし。

「わかったよ、お兄ちゃん。ココで待ってるね。……お兄ちゃん以外の野郎に触れられたくないし」

最後の方は聞こえなかったけどまぁいいか。

「ちゃんといい子で待っとけよ」

返事を待たずに玉座へ向かった。

う～ん、玉座ってあんまり座り心地良くないな。

なんてことを思っていたら眼前の巨大な扉が開いた。

「魔王様ぁ～」

ティアは全速力で俺の元まで駆けてきた。

そのまま俺の胸に顔を埋めて泣いているティアの頭を優しく撫でる。

「おいてめぇ。俺の女に何した？」

目の前の野郎に訊ねる。

「何をしたかって？　それはな…って待てよ！おい！！」

話し出しからウザかったので、先制攻撃を仕掛けた。

「黙れ。ティアに手を出した瞬間からお前の命はもうないんだよ」
「なにそれ！？　理不尽すぎだろ！？」

あぁ、五月蝿い。耳障りな声、無駄に大きいボリューム、微妙に高いトーン。全てが鬱陶しい。

「『暗く、深く、古く、冷たく、恐ろしい。』」

消し去ってあげようではないか、自称勇者君。

「『冥（くら）く、儚く、卑しく、淡い。』」

書庫を漁ってる間に魔法を覚えてしまってね、でも使う機会に恵まれなくてね。君が来てくれたお陰でやっと使えるよ。

「『深淵より来（きた）るは常世の闇。それは混沌への招待状。』」

やはり魔王なら魔王らしく闇属性の魔法でしょ。

「『全てを呑み込み、混沌の深淵へと誘う無限の闇』」

目の前の勇者サマを一瞥して小さく笑う。勇者は身動ぎ一つせずに俺を見ていた。

「『“インフィニティダークネス”』！！」

詠唱を終え、その魔法の名を口にする。

「な、何だコレ！？　来るな！来るなっ！！」

勇者の足元に黒い陰が拡がっていき、そこから無数の触手の様なものが勇者に襲い掛かる。勇者の体はあっという間に自由を奪われた。

「やめろ！　やめてくれ！！」

泣きそうな顔で懇願する勇者。

「もう遅い」

体の自由の完全に奪うと、陰が勇者を包み込むように呑み込んだ。

「ふむ。中々いいな、この魔法。気に入った」

勇者が居た場所を見ながら呟いた。

「もう大丈夫だぞ、ティア。野郎は消したから」

「本当ですか？　魔王様ぁ」

えぐえぐと泣きながら訊ねてくる。

くっ！　なんて破壊力の上目遣いなんだ！！　そんな瞳で見られたら俺は、俺はっ！！

……。

「勇者が来たのは一週間も前か……」

あの時は魔法を試せたから楽しかったけど、ティアにいらんこと

するし、五月蝿かったしでプラマイで言ったらマイナスだったしな。

ついでに勇者は城のゴミ捨て場で見つかったらしい。それを聞いて本を読み直したら数時間～数日の間、闇に閉じ込める魔法だった。なんてこったい。

勇者は確(しっか)りと簀巻きにして人里近くに棄てました。

その7：探険しましょ、そうしましょ。

さて、今現在俺は一人だ。

光とティアにはトイレに行くと嘘を吐いた。

リファは基本的には傍に居ないしな。

でだ。男が見知らぬ場所で一人、といえば勿論、探険だ！！

イエーイ！　ドンドン、パフパフ～

……こほん。今、この城について俺が知っている場所は、寝室（魔王部屋）、書庫、食堂、トイレ、大広間、風呂場、玉座の間、応接室……ぐらいかな？

魔王たるもの自分の城ぐらい全ての部屋を網羅していないとダメ魔王の称号がつくからな。（という名目の暇潰し）

さて、何処に何する部屋が在るのかを調べますか。

てなわけで任務開始（ミッションスタート）だ！

さてはてこれはどうしたらいいんだ？

近くの部屋に意気揚々と入ったはいいが、いきなり困ったことになった。

部屋から出れねぇーーー！！

押しても引いてもスライドしようとしても扉がビクともしない。

「う～ん……」
「……どうしたの？」
どうやって出るかについて悩んでいると後ろから声を掛けられた。
「扉が開かなくて出られないんだよ」
「……じゃあボクと一緒だね。えへへ」
何故笑える？　出られないのに何故笑える？
小さく笑った奴の顔を見るために後ろに振り返った。
ちっさかった。うん、ちっこい。それが第一印象。
次に顔。水色の短髪だが左目が隠れている。見えている右目を見て、美少女だと判断。だって凄く綺麗に澄んだ翠の瞳なんだよ？
しかも顔も整ってるんだよ？　中性的、だけど女の子の可愛さを残している幼い顔。いや、ヤバイね。俺はロリコンじゃないけどその道に走りそうになるわ。多分出るとこ出たら大変なことになるぞ？
この中性的なロリボクっ娘は。
さっきも言ったが体は小さい。だから胸はペタンコなんだ。想像してみろ。ほら、ヤバいだろ？　出るとこ出たら大変なことになるだろ？　ある意味（２１）界の最終兵器だな。
ガッデム。わふ～なんて知りません。アタイに触ると痺りぇりゅじぇ。
「……名前、何て言うの？」
小首を傾げながら訊ねてきた。
ぐはっ！　中々やるじゃねぇか……可愛いじゃねぇか、コンチキショー！！

「俺は月闇静夜。一応魔王やってます」

今の俺はセリフは普通だが、挙動は不審だ。

動揺しまくってます。さっきのアレで大ダメージを受けました。

はい。

「……魔王様だったんだ。ごめんなさい」

突然ペコリとする幼……少女。

「いや、別にいいよ。てか何に対して謝ってるのか分かんねぇし」

「……でも……」

「じゃあこうしよう。君が俺に名前を教える。それでチャラだ。異論、反論は受け付けない」

完全に封殺する。

意味が分からないまま謝られるのは嫌いなんだよね、俺。

「……クーロ。クーロ・メトロム」

クーロね。ちょっと呼びにくいかな？

「ヨロシクな、クー」

「……クー？」

また小首を傾げる。

ガハッ！！　……や、やるじゃねぇか。俺をここまで追い詰めるたぁな。

「クーロだからクー。ダメか？ダメならクーロで呼ぶが…」

ふるふると首を横に振る。

「……ううん、いい。クーなんて呼ばれたことなかったからちょっとビックしただけ」

小さく、そして少し柔らかい笑みを浮かべた。

「この扉の開け方知ってるか？」

「……知らない。知ってたらもう出ていってるよ」

そうだよな～……

「あ！　そうか」

「……どうしたの？」

「此処から出る方法を思い付いたんだ」

クーの手をとる。

「……どうするの？」

不安が含まれた声を聞き、クーを安心させる為に微笑んでみせた。

「こうするの」

魔力を解放する。

「“テレポート”」

淡い光に包まれたかと思ったら俺達は廊下に立っていた。

「ほら、出れただろ？」

ニッと笑いながらクーを見た。

「……普通は“テレポート”は一人にしか使えないんだよ？」

「え？　マジ？」

「……でもありがとう。助かりました」

ペコリとしたあと、踵を返して去っていった。

今日の探険はココまでかな？

本日の収穫…クーと知り合いになった。一度入ると中からは出られなくなる部屋の存在を知った。

その８：探険しましょ、そうしましょ。　Ｒｅ　ＴＲＹ

さて、今現在俺は一人だ。

光とティアにはトイレに行くと嘘を吐いた。

リファは基本的には傍に居ないしな。

でだ。男が見知らぬ場所で一人、といえば勿論、探険だ！！

イエーイ！　ドンドン、パフパフ～

……こほん。今、この城について俺が知っている場所は、寝室（魔王部屋）、書庫、食堂、トイレ、大広間、風呂場、玉座の間、応接室、中からは開かない部屋……ぐらいかな？

魔王たるもの自分の城ぐらい全ての部屋を網羅していないとダメ魔王の称号がつくからな。（という名目の暇潰し）

さて、何処に何する部屋が在るのかを調べますか。

てなわけで任務開始（ミッションスタート）だ！

で、こうなるのか……

隣にはリファが居る。

廊下を歩いていると捕まりました。はい。

「あれ？　魔王様じゃん。どうしたの？　てかティアは？　まぁいいや。今暇だったらちょっと付き合って欲しいんだけど」

みたいな感じで。

で、連れられましたよ、中庭に。

この城の中庭はバカデカイ。兵士達の訓練の場としても使われているが、それでも有り余っている場所がある。

「此処で何をするんだ？」

「ちょっと闘ってみたいな～なんて」

何故？　そして武器はないぞ。

「この城の兵ではあたしの相手にならなくなって、思うように体を動かせないんだ」

苦笑しながら訓練用の木剣を渡してくる。

「だからお願い！　ちょっとだけでいいからあたしの鍛練に付き合って」

やれやれ、こういうのはあんまり好きじゃないんだけどな。

「じゃあいくよ」

開始の声と共に間合いが詰められた。

「おぉっ！」

俺が驚嘆の声をあげるのと同時にリファの木剣が振るわれた。

ガッ！！

二人の木剣が交差する。

俺的には鍔迫り合いは嫌いなので、力を込めてリファを押し、自分も少し下がる。

「ふむ。成る程な」

リファの力量をある程度把握する。

「次は此方から行くぞ」

言い終える前に間合いを詰め、木剣を横に薙ぐ。

リファは俺の斬撃をなんとか受け流した。

だが、受け流されることは予想済みだった俺はすぐさま切っ先を反転させ切り上げる。

「――っ！！」

斜めに切り上げられた木剣はリファの木剣を弾き飛ばして空に舞わせた。

「はい、俺の勝ち」

俺は木剣をその場に刺し、回れ右して立ち去った。

後ろでリファが何か言っているが無視して中庭を後にする。

今日の探険はココまでだな……

リファが毎日俺に勝負を挑むようになったのはまた別のお話でごぜ〜ます。

本日の収穫…リファの強さ。ひいてはこの城の兵士の強さ。中庭の馬鹿でかさを知ったこと。

その9：探険しましょ、そうしましょ。　Ｒｅ　ＴＡＫＥ

さて、今現在俺は一人だ。

光とティアにはトイレに行くと嘘を吐いた。

リファは基本的には傍に居ないしな。

でだ。男が見知らぬ場所で一人、といえば勿論、探険だ！！

イエーイ！　ドンドン、パフパフ～

……こほん。今、この城について俺が知っている場所は、寝室（魔王部屋）、書庫、食堂、トイレ、大広間、風呂場、玉座の間、応接室、中からは開かない部屋、馬鹿でかい中庭……ぐらいかな？

魔王たるもの自分の城ぐらい全ての部屋を網羅していないとダメ魔王の称号がつくからな。（という名目の暇潰し）

さて、何処に何する部屋が在るのかを調べますか。

てなわけで任務開始（ミッションスタート）だ！

前回はリファに邪魔されたからな。警戒しないとな。

おぉ～、この城スゲー。

ビリヤードやダーツ等が出来る遊技場や、酒場（城の中に要るのか？　食堂でも酒飲めるし…）、警備兵のための仮眠室等々。

城の構造は大体把握できたかな？　なんて思いながら歩いている

と、妖しげな雰囲気を醸し出している部屋を見つけた。

「いや、まぁ何と言うか……ヤバい気しかしないんだけど」

だが、探険しているからには行かないといけない気がする。

ゴクリッ

息と唾を呑み込み、覚悟を決めて扉に手を掛けた。

「突入！」（カボヅカ君風に）

言いたかっただけですが何か？

……うわぁ～お（棒読み）

なぁに、コレ？

ドギツいピンクの壁紙が視界一杯に広がる。ピンクピンクな家具も徐々に視界に映ってくる。

ウゲー……なんてもんじゃないッスよ、先輩。（←誰？）

テンション等が加速度的に降下していく中、視界の隅で何かが蠢いた。

ソレは少しの間もぞもぞと動いた後、のそりと立ち上がった。

「「……」」

目が合うこと数瞬。

ソレは口を開いた。

「あら、可愛いわね。どうしたの、ぼく？」

ものっそい髭を生やした厳ついおっさんが妙に高い声で俺に話し掛けた。しかもお姉言葉で。

背筋が凍る。

髭面の厳ついおっさんがドギツいピンクの部屋に居て、お姉言葉を使う＝ソッチ系（解ってると思うがヤのつく方面ではないぞ）ですよね？

（←のひらがなの部分は下に漢字に直した文が有るので飛ばしてくれてもいいぞ。短いけどな）

いや、まて。もしかしたら、まんがいち、たぶん、ひょっとしたら、そうだったらうれしいけど、たまたまこのへやにいて、しゅっしんちがそういうことばづかいってかのうせいもなきにしもあらずなのかもしれない。いや、そうであってくれ。てんもんがくてきなかくりつでもいいからしんじさせてくれっ！！

（いや、待て。もしかしたら、万が一、多分、ひょっとしたら、そうだったら嬉しいけど、偶々この部屋に居て、出身地がそういう言葉遣いって可能性も無きにしもあらずなのかもしれない。いや、そうであってくれ。天文学的な確率でもいいから信じさせてくれっ！！）

混乱して全てがひらがなになったのは許してくれ。混乱、恐怖、動揺の三つが重なった結果、全てがひらがなになるという現象が発

現したんだ。

「美味しそうね……ジュルリ。食べてもいい？　ジュル……てか食べさせてジュル食べさせろジュルリ……あぁ、もう我慢できない……ハァハァ。ジュル……イタダキマースッ！！　ジュルジュル」

おっさんがいきなり飛び掛かって来た！

俺は急いでその場から離れる。

「あら……逃げないでよジュル」

ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバい。あのおっさん、目がマジだ。獲物を見つけた肉食動物の目になってやがる。

グルァァァァァーーーッ！！！　と叫びながら突っ込んでくる変態（おっさん）。ゴツい体の癖にやたら速いから避けるのに苦労する。

くそ、こうなったらアレ使うしかないじゃないか。

変態（おっさん）を避けると同時に側頭部に渾身の蹴りを放ち、その場を離脱する。

距離をとる間に指先に魔力を集め、魔法の発動の準備に入る。

因みに、この世界では三つの発動の仕方がある。

一つ目は口上詠法。

これはようするに詠唱だ。決められた文章を読み上げて発動する方法だ。

二つ目は手式詠法。
指先に魔力を集めて、決められた紋章や陣を描いて発動する方法。

三つ目は詠唱破棄。
詠唱すること無く、いきなり発動する方法。
ノーモーションで発動できるが色々とペナルティがある。
例えば口上詠法と手式詠法のどちらかで１０の魔力で発動して１０の効果を得られる魔法があるとしよう。だが詠唱破棄は１０の魔力では６前後の効果しか得られない。（６前後というのは平均値で、個人の魔法の素質によっては半分以下もありうる。が、どんなに素質が良くても１０の効果は得られない）
１０の威力を得たいなら１０より多くの魔力を消費するしかない。
他には詠唱破棄だと使えない魔法がある。これは発動はしないが、魔力は消費してしまうので注意。

ついでに口上詠法と詠唱破棄は発動する時、手式詠法は発動するまで魔力を消費する（消費量はどちらも同じ）。

さて、説明が長くなったが今から詠唱破棄では使えない上、発動すること自体難しいと云われている魔法を使おうではないか。
この魔法は二段詠法という珍しい発動条件がある。一段目が手式詠法、二段目が口上詠法なのだ。

まぁ、説明している間に一段目の手式詠法は完了したから二段目の口上詠法を終えれば発動できるけどな。

変態（おっさん）を避けながら詠唱を始める。

「『此(こ)の岸には終わりがあり、彼(か)の岸には始まりがある』」

「『彼の岸には終わりがあり、此の岸には始まりがある』」

「『二つの岸は繋がっていて、此の終わりは彼の始まり。彼の終わりは此の始まり』」

「『其(そ)の境界には門があり、此の始まりは生、彼の始まりは死』」

「『我開くは彼の始まり。其れ即ち此の終わり』」

「『其の門の名は地獄の門。生の終わりに辿り着く終点』」

「『我、彼の者を彼の岸へ送らん』」

「『開け地獄の門。“ヘルズゲート”！！』」

詠唱を終え、体から魔力が抜けるのを感じる。

変態(おっさん)はまだまだ元気らしく、飛び掛かって来る。が、それも突如現れた巨大な門に阻まれた。

現れた門は装飾が何も無い無骨な門だった。だが、その漆黒は何よりも美しく、装飾が無駄だと自ら主張している様だった。

堅く閉じられていた門がゆっくりと鈍く重い音を起てて開いていく。

「な、何よ…コレ？」

流石のおっさんも驚きを隠せないようだった。

門は半分程開くとそれ以上開かなくなった。

「はっ。こんなこけおどしがワタシに通用すると思ってるの？だったら筋違いね」

なんて言ってるが、足が尋常じゃないぐらい震えているのはバレバレですよ。

「こけおどしじゃないぞ。つーか逝ってらっしゃい」

俺が言い終えると門の内側から赤黒く、巨大な腕がぬうっと伸びてきておっさんを掴む。（俺の発言によって出てきたんじゃない。タイミングが良かっただけだ。）

「な、何よっ！？　放しなさい！　放せって言ってるだろうが！！」

体のゴツいおっさんの抵抗にもビクともしない巨腕。そのまま門の中に戻っていった。

腕が見えなくなると門はまたゆっくりと閉じていった。

「あー怖かった」

“ヘルズゲート”は“インフィニティダークネス”と違い、二度と戻って来れない魔法なんだ。だから簡単に使えないように詠唱破棄では使えく、二段詠法という面倒臭い方法で、消費魔力も半端でないように設定されている。

流石に魔力の消費が大きいから少し脱力感を覚える。そしてあのおっさんの所為でソッチ系の人への嫌悪感とトラウマを植え付けられた。

げんなりしたまま部屋を出て、魔王部屋に足取り重く帰る。
今は光でもいいから傍にいて欲しかった。

あぁ、早くティアの笑顔が見たいなぁ。

本日の収穫…ドギツいピンク部屋の発見と取り壊しの確定。ソッチの人達への嫌悪感とトラウマ。癒し（美少女の笑顔）を求める心。

その１０：魔王の魔王による魔王のための覚書

俺（月闇静夜）
クラス…魔王

身体能力…上の中、頭の良さ…中の上、得意武器…刀剣類（刀の方が得意）、属性…闇

何時も通りに生活していて、普段と何も変わらない帰り道、友達と別れて一人になった時に光に包まれた。その光が収まると見たことの無い部屋の中にいた。足元には何かよく分からない魔方陣っぽいものが描かれていて、部屋の照明は壁にある蝋燭（ろうそく）が灯（とも）っているだけだった。因みに召喚された瞬間から言葉が分かる、なんてことは無かった。いきなり頭を掴まれて魔力を流し込まれたんだ。（魔力を流し込まれてたことは後でティアに聞いたけど）

魔力を頭に流し込まれるのはもう嫌だ。頭の中からハンマーとかの鈍器で何度も力一杯殴られてる感じがして、ガンガンする、なんてレベルの痛みじゃなかった。

まぁ、流し込まれるのが終わったら速攻で流してきた奴を再起不能にしたけどな。

んで、言葉が分かるようになったら次は魔王だとさ。

意味が分からなかったから最初にほざいた野郎はブッ飛ばしたけどな。

……暴れすぎだろ？　とか思っただろ？　でもな、考えてみろ。いきなり変なトコに呼び出されて、言葉が通じないと判ると問答無用に頭を掴まれて尋常じゃない痛みを与えられて、謝罪もなく、有無を言わさずに向こうの都合を押し付けて来るんだぞ？　そりゃキレるだろ？　普通。

まぁ、結局はティアに説得されて魔王になってけどさ…

そんなこんなで一応魔王。魔法は元の世界に戻る方法を探している時に書庫に魔法の書が沢山在ったので、それらを読破して自分の感覚で解釈して覚えた。

元の世界でひっそりと一応剣術を学んでいた。もしかしたら今後、その技が出るかもしれない。

何故か女の子たちに匂いを嗅がれる。元の世界では光以外の女の子と話す事すら無かったのに……

ティア・クレフリ
クラス…メイドさん

身体能力…上の下、頭の良さ…中の上、得意武器…なし、属性…地

容姿についてはその2参照でお願いします。
今の俺の癒し。あの笑顔は癒される。

魔王専属のメイドさん。専属なので実は戦闘能力は高い。
ティアの属性は地だが、他の属性も結構使える。専属は伊達じゃない。
ティア自身の決め事で、暗器は持っていないらしい。
得意な武器は無いが、どの武器もそつなく使いこなす技量がある。
専属は伊達じゃない。

ティアが淹れるコーヒーは凄く美味い。専属は伊達じゃない。
ティアの寝床は魔王部屋である。ベットが二つあるから落ち着け。
誰も一緒の布団で寝てるなんて言ってないだろうが。

リファ・クポア
クラス…女剣士
身体能力…上の上、頭の良さ…中の中、得意武器…刀剣類、属性…火
容姿についてはその2を参照して下さい。
紅いポニーテールは伊達じゃない。（↑意味不明）

この城の最強の剣士らしい。
戦闘方法は基本的には『ガンガンいこうぜ』である。あまり魔法を使わない戦い方をする。が、魔法は火属性ということもあり、強力かつ派手。
火属性攻撃魔法を使わせたらこの城で一番、とはクーの談。
火属性の魔法を多く扱える他、補助魔法なら他の属性でもある程度使える。
まぁ、中庭で俺が勝てたのはリファが手加減してたからなんだよ。

月闇光
クラス…超絶ブラコン（と書いて「ヘンタイ」と読む）
身体能力…中の中、頭の良さ…中の下、得意武器…なし、属性…光
腰まで届く綺麗な黒髪を後ろで束ねてる。化粧は全くしていないらしいが、兄の贔屓目（ひいきめ）なしでも可愛い顔をしている。
ちっこくて――ちっこいと言ってもクーよりは背が高い――スレンダーな体型で凄く可愛い。……まぁ、胸は残念ですが。

何故かこの世界にいる妹。
流石超絶ブラコン。何処までも追い掛けますってか？追われる側は恐怖を覚えるね。

得意な武器は何一つないし、それどころか扱うことすら出来ない。
光属性の魔法は回復や補助の魔法が多いが、攻撃魔法は威力の高い魔法が多かったりする。

魔法に関してのみだが下手したら俺より強いかもしれない。

光が変態と言われても弁護することは出来ないが、光の性格で唯一良かったと思うところは病んでないとこだ。
光は俺を独り占めする気はなく、ただ傍に居れるなら他の事は結構どうでもいいらしい。もし俺に彼女がいたとしても、その彼女に嫌がらせとかはしないってさ。だから俺は光が好きだったりする。
（家族としてだぞ？）

クー（クーロ・メトロム）
クラス…魔法使い（ウィザード）
身体能力…下の上、頭の良さ…上の上、得意武器…杖、属性…水
容姿についてはその7を（以下略）

俺は結構気に入ってるロリボクっ娘。
喋る時は頭に三点リーダ（…↑コレな）が二つ付く。

……そういえば元の世界のクラスメイトにロリコンと呼ばれてる奴がいたが、そいつの言い分である、「俺はロリが好きなんじゃない！　好きになった女性（ひと）がロリだったんだ！！」が少しだけ理解出来たかもしれない。俺も他のロリを見ても心がときめくことはないし。まぁでも、今の俺の好きは誰に対しても恋愛感情の好きではないけどな。

閑話休題。

杖が得意、と書いたものの、実際は杖しか使えない、その杖自体もそんなに使えていない感が否めない。
所詮魔法使いの杖は飾りなんですよ、偉い人はそれが分からないんです。

魔法使いなだけあり、自分の属性である水だけでなく、他の属性でも数多くの魔法を使いこなすことができる。

まぁ、とりあえずはこんなものかな。

さて、ティアが呼んでることだし昼飯を食うか。

その１１：まさかの二度目

「魔王はどこじゃーーーっ！！」

をいをい……

またかよ……

マジで萎えるわ……

なんなん？　何でまた来たん？

「……あ、リファ。下の五月蝿いゴミ野郎を玉座まで連れてきてくれないか？」

偶々目の前を歩いていたリファに頼む。

「ティアは？　そーゆーのはティアの方がいいんじゃないの？」

至極真っ当な意見を返してくる。

「ダメだ。ティアは前に野郎に泣かされたからな。頼む、リファ」

「しょうがないな～。後で何かしてもらうよ？」

「わかった。俺にできることならな」

リファが踵を返してゴミ野郎の処へ向かう。

俺はその背中に向かって言葉を投げかけた。

「何かされそうになったらヤっちゃっていいぞ～」

……何も反応ないけど聞こえてるよな？

「そういやティア。前何されたんだ？」

ティアに顔を向ける。

「その、あの、えと……た。」

「へ？」

「……ました。」

「すまん。もう一回言ってくれ」

「肩に手を置かれました！」

顔を真っ赤にして叫ぶ。

その勢いに押され、たじろぐ俺。

「ご、ごめん。ティアにとっては嫌なことだったもんな。マジでごめん」

まぁ、心の中ではそれだけ！？　って驚いてるけどな。

「よしっ、決めた」

ティアの頭に手を置く。

「次は確りと滅殺してくるよ」

笑顔で告げる。まぁ頭に黒いってつくような笑顔だけどな。

「さて、行きますか」

玉座に向けて歩き出す。

「……う～ん、やっぱり座り心地良くないよな。あんまり」
見栄えを良くする為の無駄な装飾が邪魔だよな～。
なんて思っている間に扉が開いた。
「魔おぶふぁっ！！」
魔力の塊を顔面に投げつける。
「リファ」
名を呼ぶ。リファは一つ頷くとその場から離れる。
「一瞬で楽にしてやる」
右手の指先に魔力を集め、手を動かし始める。
「ふむ、そうだな。実験してみるか」
……
左手の指先に魔力を集め、手を動かし始める。
「『燃え盛るは炎、降り注ぐは雨』」
「『灼熱の業火は総てを呑み込み燃え猛る』」
「『紅蓮の焔は舞い落ちる水滴をも燃やす』」

「『降り注ぐ雨は全てを焼き払う炎の雨に成り変わらん』」

「『“フレアレイン”』！」

詠唱を終え、名称を詠んでも発動しない。

それを見て、自称勇者のゴミ野郎が嘲笑う。

「はっ、ミスってやがる！　これでお前の命も終わりだ！！」

やれやれ、気が早いな。俺の両手に気付いて無いのか？

右手の魔法は雷と豪雨と暴風の魔法、“テンペスト”。

左手の魔法は絶対零度と雹（ひょう）混じりの猛吹雪の魔法、“ブリザード”。

さて、ここで問題です。

“フレアレイン”、“テンペスト”、“ブリザード”。この三つの魔法が合わさるとどうなるでしょう？

“テンペスト”をベースに考えると解りますね。

答えは簡単、“テンペスト”の豪雨が“フレアレイン”に、暴風が“ブリザード”に変わります。

ですが、このままだと全てが発動しません。なので、新しく詠唱をしなくてはなりません。三つを纏める為に。

「『降り注ぐは炎の雨、吹き荒れるは猛吹雪、乱れ落ちるは迅雷』」

「『三つの災害が起こる時、合わさり混ざりて更なる大災害へと昇華する』」

「『“トライディザスター”』！！」

部屋の中が大惨事になった。

吹き荒れる絶対零度の旋風に降り注ぐ炎、所狭しと駆け回る雷。

それらは着々と部屋に傷を残していった。

ひょっとしなくてもやりすぎ……だよな。ヤバいな、ティアに怒られる。そしてボコられる。その後に光に襲われる。

いや、でも、もう遅いしな……後で土下座するしかないな。

「あらら～……」

自称勇者サマはボロ雑巾の様になり、倒れ伏していた。

「さて、二度と俺の前に現れないようするか」

指先に魔力を集める。

（中略）

「『“ヘルズゲート”』」

ボロ雑巾を見送り、部屋を後にした。

その１２：ご～せ～まほ～

あの世へと旅立つボロ雑巾――自称勇者のゴミ野郎――を見送った次の日。朝起きると、目の前にクーがいた。

「……どうした？　何か用か？」

寝起きで覚醒しきっていない、ぼんやりとした頭のまま、訊ねてみた。

「……何をしたの？」

「何が？　もうちっと詳しく言ってくれないと判らないぞ？」

「……昨日、何をしたの？」

昨日だけだと色々と候補が上がって、どれについて聞いてるのかが判断出来ない。

あれか？　いや、これか？　はたまたあれ？　ひょっとしてこれ……なのか？

眉をひそめて思考する俺を見て、クーは更にヒントをくれた。てかほぼ答えを教えてくれた。

「……玉座以外が大惨事。色んな所に広い範囲に焦げてるトコやかなり狭い範囲で焦げてて、なおかつ穴があいてるトコ、更には凍ってるトコまであった。何をしたの？」

そうなんだよな～。俺もあそこまで凄いことになるとは思わなかったんだよな～。ティアに土下座したけど軽くボコられた後に説教された。……コワイ。

まぁ、それは今は置いといて。

「アレはちょっとした実験の結果なのですよ。クーさんや」
「……実験？　どんな？」
「いや、なに、ちょっと魔法を混ぜてみたんですよ」
「……魔法を混ぜる？」

小首を傾げるクー。
ちきしょうっ！！　やっぱかぁいいぜ！　クー！！
心でそう思いながらも、話を続ける。

「二つ以上の魔法を同時に詠唱して、より高い効果を得られるようにする。それの実験」
「……どうやるの？」

あ、コレヤバい。クーの瞳がキラキラ輝いてる。
魔法使いとして、俺がした魔法を混ぜる、という行為に興味津々だ。

「場所的に無理です。はい。」
魔王部屋（ここ）じゃなくても同じです。大惨事になります。
「……ちょっと待ってて。今用意するから」

指先に魔力を集めるクー。
……スゲー。クーの手が殆んど見えない。はえー。これが経験の差なんだな。

ちょっと凹む俺。
うん、今日から秘密特訓だな。

「……出来た。『開け、異次元の扉。“ディメンションルーム”』」

おおおぉ、いきなり目の前に扉が出現した。

「……この中なら大丈夫。周りに被害が出ないよ」

扉を開け、中に入っていくクー。
後を追うように俺も入っていった。

「おおぉぉ、スゲー！　何だよ！？　何だよ此処！！　うおぉっ、スゲー！！」

テンション揚がるわ。
何、此処。かなり表現しにくいけど、とりあえず言わせて。テンション揚がるぅ！！

「……早く見せて。魔王様」

テンションが加速度的に上昇してる俺に催促。テンションのアクセルを踏み外し、そのまま元の高さまで落ちてくる。

「あーうん。そうだな」

そこで気付く。
寝起き、まだ朝飯食べてない、つーか眠たい。
でも、クーを見るとそんな戯れ言をほざくわけにはいかない。

「ではいかせていただきます」

右手で“テンペスト”、左手で“ブリザード”、口で“フレアレイン”を詠唱する。

（中略）

「『“フレアレイン”』」

詠唱を終えたのに発動しない。それがクーにとっては謎だった。

「まだだぞ、クー。ここからが重要なんだ」

「『降り注ぐは炎の雨、吹き荒れるは猛吹雪、乱れ落ちるは迅雷』」

「『三つの災害が起こる時、合わさり混ざりて更なる大災害へと昇華する』」

「『“トライディザスター”』」

大惨事再び。って言っても俺とクーは無傷だし、この部屋もなんのダメージを受けていない。

要はアレだ。大惨事の原因再び。ってことだ。

「……綺麗」

クーはポツリと呟いた。

確かに、降り注ぐ真紅の炎に雹混じりの白い旋風、ランダムに発生する閃光。凄く幻想的で綺麗と言えなくもない。

「どうだ？」

まだ止まない嵐を見ながら聞いてみた。

「……凄い。魔王様、凄い」

クーは嵐に目を奪われたまま答えた。

「……魔法を混ぜる、なんて思い付かなかった」

そんなにキラキラ輝いてる瞳で見ないで！　俺だってパクっただけだもん。ゲームとかにある合成魔法使えないかな～？　的なノリでやってみただけだから！

純粋な尊敬の眼差しにジワジワとダメージを与えられる俺。

「要は同時に詠唱して、纏める為に更に新しい詠唱をしたらいいんだ。多分」

多分、と言ったのはもしかしたら合成できない魔法があるかもしれないからだ。

「……ありがとう、魔王様。これで魔法の更なる高みを見れそう」

クーの顔は無邪気で、嬉しさが溢れる笑顔だった。

「ちなみに新しい詠唱は自分で創らないとダメだぞ？まぁ、クーなら言わなくても解ってると思うけど」

魔王部屋に戻ってくると同時にクーは何処か――多分自分の部屋だろう――へと駆けていった。

さて、俺は朝飯でも食うか。

その13：リファが、コワイです……

「あ、いたいた」

後ろからの声に振り向けばリファがこっちに向かって歩いてきていた。

「ん？　俺に何か用か？」

特に用事もなく、ブラブラ歩いていただけなのでちょっと嬉しかったりする。

「ちょっと聞きたいことがあって…」

そう言いながらちょいちょいと手招きしてきた。

「何？　他の人には聞かれたくないことなのか？」

「え？　……う～ん、どうだろ？　分かんない」

なんてことを言いながら、近くの使われていない部屋に俺を連れ込むリファ。

部屋に入ると腕を引っ張られ、勢いに余ってコケた。顔面から。

重く鈍い音と共に強烈な痛みが顔に走る。

「ぬぉぉぉぉ……！」

顔の痛みに悶えている間に、リファは部屋の扉を閉めた。

ガチャンッ

へ？

音源に顔を向けると、リファの顔が視界いっぱいに広がった。

……近ぇよ。鼻と鼻がごっつんこするぞ。

あ、ごめん。マジでごめん。自分でも分かるわ。高校生にもなって『ごっつんこ』はないな。キモい。つーか死ね、数瞬前の俺！

「……どしたの？」

自分でも何処を見ているのかさえ分からない俺がずっと黙っているのを見て、心配でもしたのか、リファが声を出す。

「いや、何でもない。大丈夫だ。それで話って何？」

逸れかけた話の流れを戻す。

「え～っと……あ、そうそう！　この前来た五月蝿いハエについて、教えて？」

ハエってゴミ野郎のことか？　まぁ、それ以外当てはまる奴は居ないけどな。

「この前よりも前に来たことあるんだよね？」

「そうだな」

「その時はどうしたの？」

「数日間とある場所をさ迷ってもらって、死にかけてるトコロを簀巻きにして棄てた」

あの時は“インフィニティダークネス”に時間制限あることを知らなかったんだよな、俺。

「ティアはその時に何かされたの？」
「何で？」
「いや、だって基本的にティアが案内したりするじゃん」
「そうだな」
「でもあの時は拒否った。それは前に何かあったから、でしょ？」
「まぁ、それくらい誰でも解るわな……」

俺だってリファの立場なら疑問に思うだろうしな。

「で、ティアは何されたの？」
「……肩に手を置かれたんだって」
「ほほぉ～う……」

この時、俺は見逃さなかった。リファの目が妖しく、そして鋭くなったのを。

「……あの時、切り刻めば良かったか……」
「ん？」

リファは蚊が鳴くような声で何かを言ったが聞き取れなかった！
ん？　なんて言ったところでスルー又は何でもない、に類する返答がくることは予想できてるよ！　ああ、できてるさ！！

「で、その後は？」

一足先に戻ってきていたリファに問われた。

「何のだよ？　ゴミ野郎なら棄てたって言っただろ？」
「違う、ティアのこと。棄てた後、何をしたの？」
「え……いや……まぁ、何と言うか……」
「さっさと言う！」

リファが、怖いです。
意を決して口を開く。

「逃げましたであるます！　隊長！」
「逃げた？　どういうこと？」

リファが、恐いです。

「……あのですね、考えてみてくださいよ。俺だってまだ１６歳ッスよ？　性に興味津々なオトシゴロの思春期（はつじょうき）の健全な男子なんスよ？　そんな半分獣（ケダモノ）みたいなヤツの前にティアみたいな美少女を置かれると困るんスよ。通常時でさえ長時間傍に居ると理性が次々と殺られていくのに、その美少女に涙目＋上目遣いなんてされたら『きゅうしょにあった。こうかはばつぐんだ。』処の騒ぎじゃないッスよ。あの時はティアにそれをされて理性が残り６２％位あったのに一瞬で０コンマ以下の領域まで持っていかれたんスから……逆に襲わなかったことを褒めて欲しいぐらいッスわ。あ、ティアを独りにはしてないッスよ？　光を喚んでから逃げましたから。ついでにその日の内に土下座したッスから」

早口で一度も噛まずに言い切った。やば、ちょっとテンション揚がった。
テンションが揚がったせいで（お陰で？）俺は言うつもりのなかった言葉を口にしていた。

「リファにされても逃げるけどな。絶対、無理。耐えられねぇ」

ここからは口にはしないが———襲うか逃げるかの二択になるが、襲った場合、いや、襲う前に斬られます。そりゃもう気持ち良いぐらいにバッサリと。だから逃げます。

ティアも同じ理由です。襲う前にボコられます。そりゃもう気持ち良いぐらいにフルボッコです。多分顔がモザイクをかけないと見られない状態になります。

本当にどうでもいいことだが、俺はMじゃない。

な？　どうでもいいことだろ？

「聞きたいことはもう無いんだな？」

「うん、ないよ」

「じゃあ、そろそろ見回りの続きをしないといけないから離れてくれ」

「ゴメン、無理」

「何でだよ？」

「いい匂いがするから」

顔近い、顔近い。

匂い嗅ぐのは離れても出来るだろ？

だから離れてくれよ。今俺の理性が次々と殺られていってるから。

つーか匂い嗅ぐな。

「それにいつも見回りなんてしてないでしょ。だからいいじゃない」

ガッシリと肩を掴まれた。

あ、またこのパターンですか。そうですか。助けを呼んでも意味

が無いってパターンですよね。わかります。

だって呼んだところでこの部屋、鍵閉まってるし。

まぁ、でも一応決まってるので呼ぶだけ呼んでみましょうか（心の中で）。

誰か助けて～！！

やっぱり誰も来なかった。

まぁ、心の中で呼んだしな。それくらい分かってるんだ……あれ？　何だろ？　目から何かしらの汁が出てきたよ？

その１４：光は何処へ？

「今日は何をしようか？」

部屋の中でポツリと呟く。

やることが無い上に、テレビやゲーム、マンガや小説、更にはパソコンも何も無い。現代の若者である俺には辛いものがある。

……そういえば俺と同じ現代っ子の妹（ひかり）はどうしているんだろうか？

ちょっと観察してみるか。

「あれ？　光は何処に行ったんだ？」

光の部屋まで行ったが、気配が無かった。

はて？　昼までまだ時間があるのに……

やれやれ、ここは俺が探すしかないのか。折角愛しの御兄様が観察してやろうと思ってたのに…手の掛かる妹だな。

そして俺は光の捜索を始めた。

「光を見たか？」

偶々遭遇したクーに聞いてみた。

「……ううん、見てないよ。何かあったの？」

クーが心配そうな眼差しで逆に問い掛けてきた。
「いや、別に何も無いよ。ちょっと用事があるだけだから」
ポンポンと頭を軽く撫でる。
「……そう？　ならいいけど」
合成魔法の研究の合間の休憩中だったクーと別れる。
さて、手掛かりはまだ無し。まぁ、始まったばっかりだからそこまで気にすることはないな。
特に落ち込むこと無く歩き出した。

「ん？　あれは……」
廊下を歩いていると、目の前に揺れる紅いポニーテールが現れた。
「リファ」
足早に近寄り、肩に手を置くと同時に声をかけた。
「何してんだ？　って聞くまでもないか」
リファの右手には木剣が握られていた。
「一緒にやる？　それならもう一本取ってくるけど」

やる？　って聞きながら木剣の切っ先を顔に向けるな。
「悪いけど今はちょっと無理だな。用事があるから」
本当はその用事すら暇潰しなんだけどな。
「そっか。じゃあまた今度頼むから」
「うぃ～ッス」
リファはそのまま中庭へと歩いていった。

「あっ！　リファに光を見たかどうか聞くの忘れた！」
リファと別れて結構経ってから突然思い出した。
「しくったなぁ……」
大きな溜め息を一つ吐き、それから意識を前向きにする。

「何処に居るんだよ？」
頭の中で次々と光が居そうな場所を挙げていく。そして実際に調べた場所を次々に消していく。それから居なさそうでも調べた場所を挙げていく。
あれ？　調べてない場所無くね？
いや、トイレとか厨房とかは見てないけどさ。

う〜ん……どうしようか？

「ティアに聞くのを最後にしよう」

知らないって返ってきたらリファの相手にでもなるか。

魔王部屋目指して速度を上げた。

「ん？」

部屋の前に着いて気配を感じた。

「んん〜？」

扉に耳をくっつけて、中の様子を探る。

だが、余り物音がしない。

俺は扉を少しだけ開けて部屋の中を見た。

「――――っ！！」

驚愕した。余りの衝撃的な光景を目の当たりにして一瞬目を離した。

まったくもって意味はないがキョロキョロと周りを確認する。そしてもう一度覗き見る。

「……」

いやいやいやいや、ないないない。

何があったんだ？　何故あんなことに？

部屋の中ではティア、リファ、クー、光の四人が俺のベッドで枕を奪い合っていた。

つーか研究と鍛練はどうした？

あ、おいっ！　畳んでた俺の寝間着をぐちゃぐちゃにするな。

……何？　その顔。畳まれてた寝間着がまだ未使用で俺の匂いがないからってそんな顔するな。それよりポイ捨てした寝間着を綺麗に畳んで元の位置に直せや。

なぁ、これって怒っていいんだよな？　いや、駄目だとしても俺は怒る。

ククククク。今の俺は誰にも止められない。

右手を素早く動かす。視線は四人に向いたまま。

「『“スランバーフォグ”』」

部屋の中が徐々に霧に包まれていく。

四人はその場に倒れて動かなくなる。

「クククククク」

霧が晴れると同時に中に入り、順番に簀巻きにしていく。出来上がった四つの簀巻きを横に並べて頭の方に椅子を持ってきて座る。

「さて、どんな反応を見せてくれるのかな？」

ククククク、と黒く妖しい笑みを浮かべてまだ寝ている四つの簀巻きを眺める。

厨房で昼飯が出来上がった頃に三つの悲鳴が城中に響き渡った。

その15：開かれし封印

誰も知らない城の地下の地下。
光が全く射し込まない深く暗い部屋の中。
その何の飾り気の無い質素な部屋の真ん中にポツンと佇んでいる大きな木箱がカタカタッと小さく、でも何度も動いている。

『カタカタッ』が『カタカタカタカタッ』に変わり、『カタカタカタカタッ』が『ガタガタガタガタッ』へと変わっていく。

木箱の揺れは激しくなり、ガタンッという大きな音と共に木箱の蓋が吹き飛んだ。

蓋の無くなった木箱の中から腕が伸びてきて、縁に手を掛けた。
ゆっくりと箱の中からナニかが出てくる。ナニかは立ち上がると足を上げて箱の中から出てくる。

「フフ……」

完全に箱から出てきたナニかは小さく笑う。そして暗く、何も見えない筈の部屋を見渡す。

「フフフ……ハハハハハ！」

ナニかは部屋を見渡し終えると嬉しそうに、楽しそうに、愉しそうに、快さそうに、心地良さそうに、喜びの、悦びの、歓びの、慶びの声を、笑い声を上げる。

「ハハハハハ！　懐かしきかな、我が城よ！　我（オレ）は再び舞い戻って

きたぞ！　忌々しき封印を打ち破り、我(オレ)は返って来たのだ！　フハハハハ！！」

高らかに宣言するように笑い叫ぶナニか。

「ん？」

他の場所に何か自分に似たモノを感じ、突然笑うことを止め、真剣な顔に変わる。そして右手を前に出し、掌を上に向ける。

「……」

とても小さな声でぼそぼそと呟く。すると一瞬、そう、ほんの一瞬だけ部屋に光が満ちた。光が収まると掌の上に黒い水晶玉が現れていた。

ナニかは黒水晶(それ)を覗き込む。

黒水晶(そこ)には床に並べられた四つの簀巻きとそれらを見下すように椅子に座った少年が映っていた。

「ククク……成る程。そういう事か」

ナニかが掌を閉じると黒水晶は砕け散った。

「目覚めていきなり楽しめるとは、我(オレ)も運が良い……ククククク」

暗く、何も見えない筈の部屋なのに迷わずに扉へと一直線に歩を進め、開け放った。

ナニかは嬉しそうに部屋を後にした。

「待っていろよ、同族。今からそちらに行ってやるから。そして我(オレ)を楽しませてくれよ……フフフフフ……フハハハハ！！」

と、言葉を残して。

「ふ……ふぁ……ぶわっくしょん！！　チキショー」

クシャミの出る瞬間、何とか顔を横に向け、前に居る———いや、転がっている四人への直撃を回避した。

直撃してたら後々が大変な事になるからな。

「汚いなぁ」

「チキショーってオッサン臭いよ、お兄ちゃん」

「ちょっと見苦しかったです」

「……ボク達にかからない様にしてくれたのはありがとう。でも、手を使って欲しかったな」

……クー以外はかけたら良かったか。

その１６：気が付けば……

「……ん」

目を覚ます。

立ち上がり、周囲を確認する。

「んん？」

何処だ？　此処は。何か牢屋っぽい感じがするけど。

「う～ん……」

脳をフル稼働させて記憶を辿っていく。

え～っと……朝起きて……ってそこは要らんな。てことはクシャミして、言葉の暴力を受けた仕返しにちょっとお仕置きして、腹が減ったから食堂に行って昼飯食って、部屋に戻るときに四人とすれ違って、「あぁ、簀巻きから解放されたんだ」って他人事の様に思って、部屋で一息入れて……あ、そうか。そこでアイツが来たんだったな。「よう、同族。来てやったぜ」って。その後、俺が言葉を返す前に何らかの魔法で意識を奪われたんだったな。

あ～、そうだった。そうだった。

さて、疑問も解決したことだし、行きますか。アイツの処へ。

「あぁ、ヤバイな。テンションが揚がってきてる。俺」

無意識の内に呟く。

「とりあえずはこの牢屋から出ないとな。」

右手で魔力の塊を放つ。

豪快な音とは裏腹に、扉は全くの無傷で少しカチンときた。

クソが！　……こうなったらアレを使うか。

魔力を指先に集めて陣を宙に描く。

「イイヤツ出てくれよ～」

右手の前に掌より少し大きな黒い穴が現れた。

俺は躊躇い無く左手を穴に突っ込んだ。

「ん～……」

コレか？　いや、コッチか？　コイツか？

左手で色々なモノに触れながら目当てのモノを探っていく。

「おっ！？」

コイツじゃないのか？　左手にいい感じの触り心地のするモノを捕らえ、ソレを一気に引き抜いた。

「おぉっ！？　きたきたきたぁ！！」

黒い穴から出てきたのは漆黒の刀身の刀だった。

鞘が無いのは残念だが、まぁ、いいか。

「今日の俺はツイてるな」

今の魔法は“ブラックウェポンズ”と言って、黒い穴の中に在る様々な武器を取り出す魔法だ。因みにこの魔法で取り出した武器はこの世界に在る限り、取り出した者の魔力を少しずつ吸収していくのだ。まぁ、解りやすく言えば維持コストだな。

さて、武器を手に入れたし、さっさと親玉（アイツ）に会いに行くか。

ついでに俺の力量も計れるだろうしな。……それによって魔王をこれからもやっていくのか、辞めてこの世界を旅してみるかを決める判断の材料になるしな。

「待ってろよ、……アイツの名前何だっけ？　てか、その前に名前聞いてないじゃねーかよ。あー面倒臭いから『ボス男くん（仮）』にする。待ってろよ、ボス男くん（仮）！　……あ、やっぱヤバい。滅茶苦茶テンション揚がってきてる」

牢屋の扉を切り落として牢屋を後にした。

その17：廊下での戦闘

「よくあるよな、兵士達(このパターン)が敵になることって」

そう呟きながら前から押し寄せてくる兵士達を見た。

「でも流石にこの数は多いだろ……」

軽く呆れつつ、刀の切っ先を後ろの床に触れさせる。

この城の兵士だし、多くの奴等と話をするようになったから余り使いたくないんだけどな……。しょうがないか。

「我刀戦技・走火！」

切っ先を床に擦りながら一気に刀を振り上げる。

切っ先が通過した場所から火が点き、刀を振った時の風圧でそのまま前に居る兵士達目掛けて伸びていった。

直撃したヤツ、かすったヤツ、避けたヤツ、範囲外に居たヤツと様々だが全員が床を走る火を見て怯み、俺はその隙に兵士達の間を走り抜けた。

「はぁ……」

嫌(ヤ)だなぁ。知り合いに使うのも嫌だけど、何よりアイツに知られるのは嫌だなぁ。だって俺の事を何らかの手段で知った訳だしさ、多分、同じ手段で走火も知られた訳だろ？　ズリーよ。俺(コッチ)は知らないのによ。

なんてことをグチグチと思いながら進んでいくと、小さい影が前

方に確認できた。

うん、嫌な予感しかしないんだけどさ。

影の正体が見える前に無数の水の弾が飛んできた。

「くっ！」

避けつつ幾つかの水弾を斬っていく。だが、一向に弾が減る気配がない。

「ちっ！！」

舌打ちをして一度廊下の角まで退く。こういうときの嫌な予感って全人類共通で当たるよな。

やっぱり魔法ってエグいな。何あの強さ（セコ）？　さっきの兵士達よりやりにくいんですけど。攻撃のモーションすらとれない。一体俺はどうしたらいいの？

なんて考えた所で何も変わりやしない。

「あー！！　もう！」

ノーダメージで通ろうとするのは諦めるしかないな。

ボス男くん（仮）の処まで辿り着いた時、回復させてくれると嬉しいけどな。まぁ、有り得ないけどな。

腹を括りもう一度水弾が飛びまくっている廊下に出る。

半身になり、刀を水平にしながら腕を矢を引き絞るかのように限界ギリギリまで後ろに引く。

その間にも水弾は幾つも俺に中(あた)り、衝撃とダメージが俺を襲うが、体制を崩さないように踏ん張り、痛みに耐える。

「我刀戦技・弾風！」

勢いよく刀を前に突き出す。刀身が空気の塊を高速で前方に撃ち出した。

数瞬後、無数の水弾はパタリと止んだ。

俺は急いで駆け出し、前で倒れている人物に近づいた。

大丈夫か？　と声を掛けようとしたが、気を失っているらしく、声を掛けずに怪我が無いか簡単に調べた。

「よかった……」

大した怪我は無く、弾風も痣になっていなかった。……まぁ、何処に中ったかは判らないけど。

「ごめんな」

聞こえていないと解っているが耳元で呟き、廊下の隅に寝転がした。

「先を急ぐか……」

また兵士達に追われたくないからな……

ごめんな、クー。コレ終わったら何か一つ言うこと聞くから。今は放置することを赦してくれ。

俺はその場を後にした。

その１８：大広間にて

廊下を進んでいき、大広間に入った。

「次はお前かよ……」

大きな溜め息が出た。

目の前には紅いポニーテールのあの人が居た。

さっきの廊下での出来事より面倒臭くて、ダルくて、しんどいなぁ。オイ。

リファは気落ちしている俺に躊躇い無く斬りかかってきた。

「うぉいっ！！」

振り下ろされた刃をかわして間を開ける。

「我刀戦技・走火！」

突っ込んでくるリファに向けて本気で放つ。

だがリファは簡単に避けた。

でも走火が避けられることを分かっていた（だって直線にしかいかないし）俺は次の行動に移っていた。

「我刀戦技・弾風！」

リファの着地点を予測し、着地と同時に鳩尾に中るように風の弾を放った。

が、弾風がリファに中ることは無かった。リファは右手の剣を横

に一薙ぎして風の弾を潰した。

「うっそー……」

イケると思ったのに……。つーかタイミング良すぎだろ。刀身の真ん中よりちょっと先のところで斬りやがって。……ちくしょー……凹むッス。

リファは俺が凹んでいてもお構い無しに攻めてきた。

「おっ、ちょっ、まっ！」

切り下ろし、切り上げ、袈裟懸け、横薙ぎ等々。様々な角度から斬撃が襲い掛かってくる。

その斬撃の連撃を何とか防ぐ。いや、防ぎきれていないな。身体に裂傷が次々に刻まれていってるし。やっぱりリファは強いな。

はぁ、走火と弾風で済ませたかったのにな。リファが強いのは分かっていたけど、走火と弾風以上のヤツだとちょっと加減ってもんが出来なくなるし……。それに何より傷付けたくないのに……。でもこのままだと体の所々から出血してる俺はヤバイしな……。しょうがないって割り切らないと……

「ふっ！！」

力任せにリファの剣を押し返し距離をとり、前から突っ込んでくるリファを確りと見ながら脇構えに構える。

「我刀絶技……」

リファを見据えながら刀を半回転させ、斬撃を打撃に変える。本来は半回転なんてしないで斬撃のまま放つのだが、今の相手がリファで、傷付けたくないから打撃に変えた。
……打撃に変えるなんて今までやったこと無いからミスるかもしれないってことは内緒の方向でお願いします。

「百花繚乱！！」

渾身の力で逆袈裟に切り上げる。
次の瞬間、前方に無数の打撃が飛んでいき百もの花を咲き乱れさせた。

「キャァァァーーーーッッッ！！！！」

リファは大きな悲鳴を上げながら壁まで吹き飛んでいった。
……よかったぁー、成功して。ミスってたら今頃血祭りに上げられてたって絶対。とか思っていたのも内緒の方向で。

震えている体に活を入れ、リファへと近づく。
気絶してるのか。え～っと、怪我は……無さそうだな。良かった。

「はぁ……」

リファもクーと同じ様に大広間の隅に寝転がした。

「ちょっとの間体が痛いと思うけど、我慢してくれ。痛みは引き取れないから。」

少し苦しそうな顔をしているリファに一瞥して、自分に言い聞か

せるように呟いた。

そして更に先を目指して歩き出した。

その１９：同族同族〜

「倒したか……」

玉座に座り、黒水晶を見て呟く。

「まぁ、アレぐらいは倒してくれないとな。」

魔法で無理矢理言うことを聞かせていたから本来の力は出ていなかった訳だし。

……それにしても最後の技……アレは気を付けないとな。あの威力は我（オレ）でも危ないからな。

「んー、んー」

音源に目を向ける。

「そうかそうか、そんなに構って欲しいのか」

音源に歩み寄る。

しゃがんで目線を合わせ、何かを訴えている眼を見つめる。

「成る程。それほどまでに笑いたいのか」

はっはっは、と笑いながらがら空きの脇腹に手を伸ばす。んー！

んー！　って聞こえるけど無視だ。何を訴えているかは容易に判るが今はそれをする訳にはいかない。

「んー！　んー！」

隣も五月蝿いな……
そこまで構って欲しいのだな。やれやれ、人気者は辛いな……
片手をお隣の無防備な脇腹に手を伸ばす。
フハハハハ！　楽しいな！

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」
キッツー……いやマジで。大広間から四階（ここ）に来るまでにエンカウントし過ぎだろ……
「はぁ……はぁ……ふぅ」
呼吸が整ってきたな。
さて、後はこの部屋の中に居るボスを倒して終いだな。
「よし、行くか！」
勢いよく扉を開ける。
が、誰も居なかった。
「はい？」
え？　居ないの？　あれ～？　俺って魔王部屋（ここ）でヤられたんだよ

な？　あるぇ～？

真剣に首を傾げた。
魔王部屋（ここ）じゃないなら何処だよ？
ウンウン唸りながら魔王部屋を後にした。

廊下を歩いているとふとあることを思い出した。

「そう言えば同族って言ってたな」

同族から考えていけば何処に居るのか判るんじゃ……？
んー、同族、ねぇ。……もしかして俺の前の魔王とか……はないな。前魔王なら俺は必要じゃない筈だしな。
じゃあ……俺と同じ異世界人……もさっきと同じ理由でないな。召喚するのは魔王にする為だしな。

んー？　マジで何が同族なんだ？

あー、もう！！　面倒臭ぇー！
もっとシンプルに考えろ。城に攻め込んできた奴は何処に向かう？　玉座だろ！
取り敢えず玉座（あそこ）に行って、居なかったらその時はその時だ。

いや～居てくれて助かったよ。居なかったら魔法で城ごとブッ飛ばすつもりだったし。それよりも……

「何してんだよ？　テメェは。返答次第ではグッバイ胴体にするぞ？」

漸(ようや)く俺に気付いたのか、ヤツはゆっくりと振り返った。
「何って擽(くすぐ)ってる」
「オーケーオーケー。グッバイ胴体にはしないでやる、よ！」
床を蹴り間合いを詰め、横に切り払う。
「血気盛んだな、同族」
「だから同族って何なんだよ！」
簡単にかわして距離をとったボス男くん（仮）に問い掛ける。
「なに、そのままの意味だよ。我(オレ)と君は同じなのだよ」
だから意味解んねぇよ！

その２０：前哨戦

「……まぁいいや。同族についてはボコって聞けばいいわけだし」

刃の切っ先を床に触れさせる。

「走火か？　我（オレ）には中らないぞ？」

「んなもん知ってるよ。弾風も意味無いってこともな」

「なら百花繚乱か？　確かにあの威力なら我（オレ）も危ないが、一度見ているから直撃は有り得ないな」

「何勘違いしてんだよ。誰が使うって言った？」

「だが百花（アレ）繚乱が我刀の最強の技なのだろう？」

「はぁ……。何時百花繚乱が最強だって言った？　確かに絶技は高威力の大技だが最強なんて言った覚えはないぞ」

「ふっ。ならば見せて貰おうか。我刀の最強の技とやらを」

「嫌（ヤ）だね。誰がお前の言う通りにするか！」

間合いを詰め、今度は切り上げる。

また避けられたが、今度は追撃する。

「ふふっ」

様々な角度から斬りかかるが全てかわされる。

「ちっ！！」

ヤツの喉を狙い突きを放つも、簡単に避けられ、間合いの外に逃げられた。

「どうした？　我(オレ)に届いていないぞ？」
「ククッ」
悉(ことごと)く攻撃がかわされているにも関わらず、自然に笑みが零れる。
「何が可笑しい？」
「いや、何も可笑しくないさ。唯(ただ)、これでやっと本気になれるな～って思っただけだ。」
今、俺の前にはヤツ一人。俺の後ろにティアと光が居る。つまり、俺の技の巻き添えにはならない。だから笑う。だから微笑む。だからにやける。だから頬が緩む。
因みにティアと光は手足をロープで縛られ、猿轡を噛まさせられていて身動きがとれない状態になっている。
「本気を出すと言っても女剣士(リファ)と戦った時と同じになるだけだろう？　それならば我(オレ)に攻撃は一切中らないままだぞ？」
切っ先を床に触れさせる。
「それはやってみないと分からないもんだぜ？」
呼吸を整える。
「我刀真技・双炎！」
刃を床に擦りながら切り上げる。
「双炎？　走火ではないか」

ヤツは俺を小馬鹿にするように小さく笑う。
だが俺はその笑いに反応すること無く、切り上げた勢いをそのまま利用して、体を挟んだ反対側の床を擦りながらもう一度切り上げる。

「なっ！！」

ヤツは驚く。何故なら二本の火が一つになり、炎の波に姿を変えて襲い掛かってきたからだ。

「双つの火は合わさってより強く、より大きくなり相手を呑み込む。それが双炎だ」

ヤツが炎に呑み込まれる様を見ながらも、構えを解くことはしない。何故なら……

「『“ダークフォース”』！！」

この程度で倒れてくれる様な奴ではないからな。
……それにしても力技で強引に消すとはな。

「中々やるではないか」
「そう思うんならさっさと本気で掛かってこいや」
「ククク。……その言葉、口に出したことを後悔するなよ？」

ヤツの雰囲気が一変する。

「……そうこないとな」

俺は小さく呟いた後、頬が緩むのを必死に堪えた。

その２１：奥義

ヤツが本気を出してから数分、中々に厳しい状況に追い込まれていた。

中距離では魔法の撃ち合い。

これは詠唱破棄出来るヤツの方が有利だったので出来る限り近距離での斬撃を繰り出す事に変えた。だが、ヤツは斬撃を掻い潜り、俺の懐まで来やがった。

それからは至近距離での殴り合い。拳撃、蹴撃の応酬。刀を持っている分、俺が不利だった。

「ちっ」

流石にこのままではヤバいと判断した俺は無理矢理横に薙ぎ払い、距離を取ろうとした。

ヤツはしゃがんで回避し、俺の思惑通りにはならなかった。が、ヤツは片足を伸ばしたままだった。

一瞬、何故？　と思ってしまった。次に何がくるのか解っていた筈なのに。

「ふっ」

その一瞬を突いて片足を軸にしてその場で一回転。伸ばしていた足が俺に襲い掛かった。地を這う様な回し蹴りにより、何とか避けたもののバランスを崩された。

その間にヤツは俺との距離を取った。体勢を立て直しヤツを見る。ヤツは俺に手を翳していた。

「『“デビルズスピアー”』！」

詠唱破棄とかヤメテ！　俺まだ魔法は使い慣れてないから！

俺の真上の空間が裂け、その中から黒い槍を持った悪魔であろう者が俺に視線を合わせていた。悪魔は精一杯槍を振りかざし、俺目掛けて投擲した。

その黒い槍は闇を、力を、凝縮した物だ。つまり、槍の形をした闇で、力の集合体である。って何かで読んだ気がする！

「くそっ！」

詠唱破棄出来ない俺の魔法は間に合わない。正確には詠唱破棄出来る魔法もあるが、それはあの魔法（デビルズスピアー）に一瞬で消されるだけで、防ぐどころか、威力を削ぐことすら出来ないほどの弱い魔法だ。

「我刀絶技・百花繚乱！！」

無数の斬撃で威力を削いでいき、強引に消す。

だが、百花繚乱を出した直後――放ったと同時――に別の攻撃が俺を襲う。

「ぐっ！」

ヤツの蹴りが脇腹にめり込んだ。その後に飛ばされた。

ヤツは無慈悲な目をして掌を俺に向けた。

「これで終わりだ。『“フレアタワー”』」

足下から火柱が立ち上る。

「ぐあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

焼ける！　身体が焼ける！

「だから言ったろう、後悔するなよって」

ヤツは呆れ顔で俺を見下す。

「ククッ」

「何が可笑しい？　それとも脳髄まで焼けて壊れたか？」

熱い、それは認めよう。

痛い、それも認めよう。

だがな、俺はこれよりも熱く、これよりも痛い思いをしたことは幾らでもあるんだよ！

「……我刀……絶技……！！」

「なっ！？　馬鹿なっ！！」

アイツとの距離があるにも関わらず、刀を最速で何度も斬りつける。否、最早振り回すだな。

「何をしている？　そんなことをしても我（オレ）には届かないぞ」

絶技と聞いて一瞬慌てたが、俺がただ刀を振り回しているだけなのを見て、落ち着きを取り戻したようだ。

ククッ、そのまま吹っ飛べ。

「疾風怒濤ォ！！」

叫び声と同時に複数の真空の刃が衝撃波を放ちながら飛んでいく。
衝撃波のお陰で俺の周りにあった炎の柱は消えていった。

「舐めるなっ！　『“ブラックウォール”』！」

真空の刃が全て黒い壁に吸い込まれていった。

反射か堅さで防ぐ壁だと思ったから驚いた。
だが有難い。黒い壁でヤツの視界は俺を捉えられなくなっている。
気取られないようにひっそりと切っ先を床に触れさせる。まぁ、バレてるだろうがな。ヤツも準備してるだろうしな。
あの壁が消えた瞬間が勝負だな。

「我刀奥義……」

呼吸を整え、集中する。服どころか身体中がボロボロでどこもかしこも痛かったが、段々気にならなくなっていく。

どれくらい経ったのだろうか？　数瞬？　数秒？　数分？　俺には分からない。まるで時が止まったかのように感じられる。だが、瞬きすること無く、集中し続ける。

黒い壁の上の部分が薄くなり、消えている。それを皮切りに上から下へと徐々に薄くなり、消えていく。

今だ！

刃を擦らせながらその場で一回転する。
そしてそのまま切り上げた。

「万火繚乱！！」
「『“アニヒレイトダークネス”』！！」
炎を纏った無数の斬撃が飛んでいく。漆黒のレーザーが飛んでくる。赤と黒が二人の間でぶつかり合い、互いに潰し合っている。
「……我刀の奥義は破られない。例え何があろうとも、どんなに不利な状態でも破られてはいけない。それが奥義である」
昔、じいちゃんに万火繚乱を教えて貰った時に言い聞かされた言葉。
奥義であるからこそ、常勝だ。
奥義であるからこそ、不敗だ。
奥義であるからこそ、最強だ。
そう教え込まれた。
例え足が無くなっても、例え立ち上がる気力すら無くても、例え死の一歩手前でも、放つなら、使うのなら、絶対に勝たなければならない、絶対に負けてはいけない。そう教えてくれた。
だから俺は負けるわけにはいかない。
だから俺は……勝つ！！
「く……そ……がぁっ！！」
斬撃はアイツの魔法を押し込んでいった。

「無数の炎を纏った斬撃は万もの華を咲き乱れさせる」
「ぐぁぁぁぁぁぁーーーーっっ！！」
炎の華が咲き乱れた。

その22：魔王様はスマキがお好き？

「魔王様！　魔王様！！」
「何だ？　騒々しい……」
「大変です！　謁見の間が！」
「五月蠅い。謁見の間に行けば良いのだろう？　だから喚くな」
やれやれ……朝ぐらいは落ち着いて行動してくれ。まだ寝起きなんだよ。
「成る程……」
謁見の間に向かいながら黒水晶を通して様子を見た。
「ククク」
自然に笑みが零れた。
今日は退屈せずに済みそうだな。この時はそう思っていた。
「何をしている？　ゼオン＝アルベリヒ」
謁見の間に入るなり、声を上げる。
「何……とな？　お前が見ている通りだよ、アルセナイト＝メレディアス」
玉座に座り、挑発するように笑うゼオン。
「ククッ、そうか。つまり刃向かうって事だな」

「いやいや、刃向かうんじゃない。貴様を倒すんだよ」

やはり笑みが零れる。

「『“フリーズランス”』！！」

「『“ダークブレイズ”』」

飛んできた蒼い槍を黒炎が阻む。

「『“デビルズスピア”』」

お返しと言わんばかりに黒の槍を放つ。

「ちっ」

ゼオンは舌を打ち、横に跳ぶ。

「『我願う。彼の者が消え去ることを。我望む。彼の者の消滅を』」

「『“フレイムチャリオット”』！！」

燃え盛る火炎で出来た戦車が突撃してくる。が、先程の黒炎がまたしても呑み込んだ。

詠唱を阻止する為に中々の魔法を放ってくるな。だが、その程度では止められないぞ、ゼオンよ。

「『故に我命ず。彼の者を跡形もなく全てを滅する事を』」

ゼオンを見る。

すると何故か笑っているではないか。それも此方を馬鹿にした笑い。

それと同時に周りに数多くの魔力を感じた。そして体が動かなくなっていく。

成る程、そうか。最初からこれが狙いだったか。

我(オレ)を封印することが。

折角詠唱したのに……。あと少しだけ待ってくれても良かったのにな。

そうしたらゼオン(あいつ)は殺せたのに。

……畜生が。

〜〜〜〜〜〜

「ククッ」

あの時の事を思い出すとはな……

「何笑ってんだ」

その声と同時に後頭部に衝撃が来て、その所為で床との熱いＫＩＳＳをする羽目になった。

……畜生が。

「ククッ」

目の前の簀巻きは意識を取り戻すと同時に笑い出した。

「何笑ってんだ」

なんとなくイラッと来たので踵を落とす。

鈍い音がしたが気にしない。

「ほら、目ぇ覚めただろ。俺の質問に答えろよ」

簀巻きを見下し、踵を頭に乗せたまま話を進める。

「お前は何だ？」

「……」

動かないし、喋らない。

しょうがないな。足を退けてやるか。

踵を頭から離し、足を組んだ。

「ほら、これで喋れるだろ？　さっさと言え」

簀巻きは顔を上げて俺を一瞥した後、口を開いた。

「……魔王だ。ほら、答えたんだからさっさと簀巻(これ)きを外せ」

簀巻きは存在意義の喪失を望んだ。

「名前は？」

ここは普通はシカトする流れだからな。俺の意思ではない、世界の理なんだ。

「……アルセナイト＝メレディアス。ほら、答えただろう。だから簀巻(これ)きを外せ」

「魔王って言ったが何時の魔王だ？」

「昔だな。遥かなる遠い過去」

前は魔法関連の本しか読まなかったからな。歴史関連の本も読むべき……か？

「早く簀巻(これ)きを外せ。質問には全て答えただろう」

「なら俺に従うと誓え。そうしたら外してやる」

「誓ってやるよ同族。だから外せ」

「同族なんて呼ぶな。俺は月闇静夜だ。同族と変な渾名以外なら好きに呼べ」

同族じゃねーから。大昔の魔王と異世界から最近やってきた俺は別の者だから。魔王って点以外は同じとこ全く無いから。

そんな事を思いつつ、簀巻きから解放してやる。

「取り敢えずこれからヨロシクな、アルセン」

「普通はアルじゃないのか？　魔王になる前はアルと呼ばれていたが。」

「俺は俺の好きなようにやる。だからアルセンと呼ぶ。ついでに言えばアルよりアルセンの方が何となく語感が好きだ。」

「適当だな、オイ……」

こうして新たな仲間が増えた。

「なあ、簀巻きはお前の趣味なのか？」

「さあ？　どうだろうな？」

その２３：お悩み魔王様

微かな明るさが包んでいる部屋で、俺は光と居た。
一本の蝋燭が唯一の光源で、その灯りは頼り無いものだが、小さなこの部屋では十分と言える明るさだ。
さぁ、本題に入ろうか。

「なぁ、光。俺さ、最近自分の存在意義が分からなくなってきたんだけど、どうしたらいいのかな？」

剣技も魔法も特化してる奴がそれぞれいるし、両方出来ると言っても俺より上の奴が現れたし。
しかも遥か昔だが魔王だったらしいし。
俺の居場所無くね？　コレはアレか？　俺に死ねっつってんのか？

「大丈夫だよ、お兄ちゃん！　お兄ちゃんには『お兄ちゃん』って居場所（ポジション）があるから」

……何て言うかな、その、あ～……えっと、うん、何でだろうな。素直に喜べない。
光の考えてることが、顔を見ただけで解ってしまって喜べない。

居場所が無いと悩んでるお兄ちゃんに『お兄ちゃん』という居場所を教えて、そのまま妹萌えにして、依存するように仕向けてやる。

って顔にでてるんスけど……。しかも、

依存するようになったらあんなことやこんなことを……ダメッ、お兄ちゃん！　そんなことまでっ！！　ってなるように……エ

へへ。

……遠い地に居る父さん、母さん。どうやら私達は娘（妹）の育て方を間違えてしまったようです。更に残念なことに、真っ当な人間への矯正も無理な様子です。

父さん、母さん。俺はどうしたらいいのでしょうか？　『存在意義が分からない』という悩みが、ちっぽけに感じるほどに悩んでいます。

私自身、そこまで光を甘やかした覚えは無いのですが……。

勉強は解き方を教える程度で、一度たりとも光の宿題をやったことはありません。その他のことも、光が本当に無理だと感じたときにたまに手を貸す程度の筈です。

それなのに何故、光は超絶なまでのブラコンになってしまったのでしょうか？

しかも変態になってしまっています。世間一般から見て、ついでに兄の贔屓目を入れても変態だと認識される程のレベルです。本人は、1日に数十回お兄ちゃんの匂いを嗅がないと死ぬ。と豪語しています。立派な変態さんです。

遠い地の父さん、母さん。そろそろ本格的に私の貞操の危機です。血の繋がった妹に犯されるのも時間の問題です。もう一度言います。

私はどうしたらいいのでしょうか？

……。

さて、腹も減ってきたことだし、晩飯を食いに行くか……。

俺は逃げる様にして、光に気取られないように部屋を出た。

今日のおかずはなんだろな～♪　っと。

その２４：魔王様の失踪？

「今日はいい天気だなぁ～」

中庭にあるベンチに寝転び、空を見上げる。
雲ひとつない空は蒼く澄み渡っていた。

「ん？　……あれは月か」

視界の端に何が映ったが、すぐに正体が分かった。
月か、……月ねぇ。
久し振りに夜はあそこに行くか。この世界に来てからは一度も行ってないけど。

「ふふっ」

特に理由はないけど小さく笑う。

『夜も今のまま晴れますように……』

小さな願いを残し、俺は微睡みに身を任せた。

「魔王様、食後のお茶をお持ちしました……て、あれ？」

魔王様の部屋にお茶をお持ちしたのに肝心の魔王様が居ません。
何処へ行かれたのでしょうか。
目の前に見慣れた紅が通り過ぎようとしていたので聞いてみる。

「あ、リファちゃん。魔王様を見掛けませんでしたか？」
「いや、見てないけど。……何かされたのか？」
少し顔が怖いです。リファちゃん。
「いえ、お部屋に居ないので何処に行ったのかな、と」
「なんだ、そういうことか。とりあえずあたしは見てないけど見掛けたら連れてくるよ」
そのまま歩を進めて去って行くリファちゃん。なんだって言った時の『ちっ』っていう顔は忘れませんよ。私をダシに魔王様を殴る――いえ、魔王様と戦うつもりだっていうのはバレバレです。
「……どうしたの？」
思考がリファちゃん一色になりかけた所にクーロちゃんが話し掛けてきました。
「いえ、少し考え事を。それはそうと魔王様を見掛けませんでしたか？」
「……ううん、見てないよ」
「そうですか。では失礼します」
探しに行こうと踵を返すと裾を引っ張られた。
「……待って。ボクも付いていく。……一人より二人の方が見つけやすい……と思う」
確かにそれには同意します。

「では一緒に探しましょうか、クーロちゃん」
「……うん」

新しい仲間が増えた。

クーロちゃんと探すこと十数分。未だに手掛かりすら見つけられないでいた。

「……ねぇ、ティアちゃん」
「何ですか？」
「……アルに聞くのはどうかな？」
「アルさんですか……」

確かに今まですれ違った人に聞くのと近くの部屋を片っ端から探していましたけど……。

「……アルなら本人が知らなくても黒水晶を使ってもらえば見つけれると思う」

成る程。アルさん本人の情報より、魔法をアテにするんですか……。思い付きませんでした。

「では、アルさんに聞きに行きましょうか」
「……うん」

アルさんの部屋を目指して歩き出す。一応、すれ違った人に聞き、近くの部屋をひとつひとつ調べながら。

魔王様、何処に居るんですか？

その25：覗き、駄目、絶対。

「いきなりどうした？　ノックもせずに入ってきて」

そう言えばそうですね。ノックをし忘れていました。

でも今はそんなことはどうでもいいんですよ。

「魔王様を見掛けませんでしたか？」

「目「……目の前に居るだろう、なんて戯れ言をほざいたら冗談抜きで殺すよ？」……見てません」

反応を見るに言うつもりでしたね。でも言わせません。つまらない冗談に付き合う気は私もクーロちゃんも全くありませんから。

「では、黒水晶で探して下さい」

知らないだろうと思っていたので、間髪入れずに此処に来た目的を話す。

「それは無理だ」

え？

「あの、もう一度お聞きしますが……」

「無理だ。何度聞かれても答えは変わらない」

「……どうしてなの？」

クーロちゃんが私達の共通の疑問を口にする。

「黒水晶(アレ)は『見たいモノを見る』のではなく『見たいトコロから見る』魔法だ」
「「……」」
私達が黙っているのを一瞥してから口を開いた。
「例えばの話だが、仮に我(オレ)がティアの入浴を覗くとしよう」
「死にたいんですね。解りました。今楽にしてあげますよ」
「……ストップ、ティアちゃん」
何故止めるんですか？　アル(コレ)さんは私の入浴を覗いているんですよ。
「仮の話だ！　我(オレ)は実際にはやってない！」
「そんな話、信じられません」
「それにだ。黒水晶(アレ)は魔力の消耗が激しくて余り使うのは好きじゃないんだ。前はセイヤの気配を微かに感じて、それを確認する為に使っただけだ」
そんなもの知りません。だって私は使えませんので。
「犯罪者達(みんな)はそう言うんですよ。自らの罪を隠すために」
「もう一度言うがあくまで仮の話だ！　もしやっていたらティアよりも先にセイヤにバレてグッバイ胴体させられているぞ！」
「……いい加減にしやがれ二人とも。……黙らないとブチ殺すぞ」
何時もよりハッキリと、かつ低い声でクーロちゃんは無表情に言い放った。
ク、クーロちゃん？　目が本気なんですけど……？

「……ティアちゃん。今は魔王様を探しているんだよね？　だったら黙ってアルの話を聞く。……アルが本当に覗いていたらその時に容赦無くボコボコにすればいいだけなんだよ。……アル、話を続けて」
「「は、はい！」」

こ、怖、怖い。クーロちゃん怖い。

「えっと、覗くとしよう。までだったか？　この場合、『見たいモノを見る』ならばティアの入浴が見たいからティアを見ていれば良いし、タイミングが良ければ脱衣シーンから着衣シーンまで拝める訳だ。
だが『見たいトコロから見る』だと風呂場の何処かを最初に指定しないと見れないし、一度指定すると変更出来ないんだ。変更するには魔法を解いて、また新しく発動しないといけない。
つまり、脱衣シーンが見れないだけでなく、場所の指定をミスれば魔力を無駄にするだけになる、なんてこともあるわけだ」

一息を吐き、話を続けるアルさん。

「更に見たい場所を実際に自分の目で見て知らないと見ることは出来ないんだよ。要するに黒水晶（アレ）は『自分が知っている場所から見える景色を見る』魔法なんだよ。簡単に言えば、さっき言った『見たいトコロから見る』魔法だ。だからセイヤを見ることは出来ない」
「……気配を感じて使うんでしょ？　だったら魔王様の気配を今感じて黒水晶で場所を教えて」

そうですよ。気配を探れるならさっさと探して下さい。

「それなんだがな……、今セイヤの気配が全く感じられないんだよ」

どういうことですか！？　魔王様はこの城から一度も出たこと無いのに。
クーロちゃんも驚いているようですが。
「あぁでも安心しろ。この城からは出ていないから」
「……どうして分かるの？」
気配を感じられないのにどうして城からは出ていないことが分かるんですか？
「この城の外には遥か昔に我(オレ)が掛けた魔法があるんだが、その魔法は地上でも地下でも上空でもその魔法に触れたら俺に触れた物の情報がある程度伝わる魔法でな、不可視で触れたことにも気付かない上に並大抵の者では魔力すら感じられない魔法(モノ)なんだが、セイヤはそれに触れていないんだよ」
どうしてそんな魔法を掛けてるんですか、貴方は？
「……それは本当なの？」
「ああ本当だ。この魔法は城の周囲に筒状に掛かっているから地下深くだろうと遥か上空でも感知できる。この魔法に触れずに城に入る又は城から出るなら点で移動できる術が無いと無理だ」
点で移動する……？　意味が分かりませんね。
「……テレポート等の瞬間的に中～長距離を移動することだよ」
成る程、そういう意味でしたか。……何故クーロちゃんは口にしていない私の疑問に答えているんでしょうか？

それはそうと、私が今余り喋っていなかったのは仕様です。頭では思うけど、口に出す程の事ではない事ばかりなので口を開かないだけです。ワザとなのです。これも全てはメイドの嗜みです。

さて、今までの話を纏めましょうか。

「つまり、魔王様は外に一度も出たことが無いのでテレポート等の魔法は使えないのでこの城の何処かに必ず居るが、アルさんは気配を感じられないので探すことが出来ない。ってことですね」

美味しい所は持っていくのもメイドの嗜みです。但し、ご主人様――私で言えば魔王様――が傍に居る時は持っていかずにご主人様に差し上げるのが決まりです。

「ちっ、使えねぇな」

「……この役立たずが」

「え？　何それ？　我（オレ）ってそこまで言われる筋合い無いよな？　そっちが勝手に我（オレ）の部屋に来たんだよな？」

まぁいいでしょう。この役立たずは放っておきますか。

クーロちゃんと目を合わせ、互いに頷き合う。どうやら同じ考えだった様ですね。

何か言っているアルさんを無視してクーロちゃんと部屋を出た。

「どうしたの？　二人とも何か元気無いね」

少し歩いていると光ちゃんと遭遇した。

「……ティアちゃん」
「はい、わかっています」
言葉少なくても意思の疎通をする私達。
これが最後のチャンス。そして最大のヒント。魔王様の妹君。
……今まで光ちゃんの存在を忘れていた事は内緒です。
「魔王様が何処に居るのか知っていますか？」
知らないと言われるともう諦めるしかない。
「え？　お兄ちゃん居ないの？」
「はい。お部屋にお茶をお持ちしたのに居なかったんですよ」
私がそう言うと、少し驚いていた光ちゃんはクスリと微笑(わら)った。
「……何処に居るのか知っているの？」
クーロちゃんがもう一度訊ねると、光ちゃんはこう答えた。
「今日の夜空は晴れてますか？」
答えではなく質問でした。
「こっちの質問に答えて下さい」
「……ティアちゃん、ちょっと待って」
何ですか、クーロちゃん。知っているならさっさと教えて欲しい性質なんです、私は。

「……今夜は雲一つ無い快晴だよ」
「そうですか」
光ちゃんは一人納得して数回頷く。
いや、だから早く教えて下さい。いい加減怒りますよ？
「……そういう事なんだね」
「はい、そういう事です」
そういう事って何ですかー！？

その26：どんな習性なんですか！？

「ねぇクーロちゃん。本当にこんなところに居るのですか？」
「……ボクの考えが光ちゃんと一緒なら居ると思う」

今、私達は屋上に居ます。未だにクーロちゃんは詳しいことを教えてくれません。

「……あれ？　何処にも居ない？」

余り広くない屋上を歩き回ること数分。特に何も見つからず、クーロちゃんは自分の考えが光ちゃんと違うのでは？と思い始めました。

……ん？　アレは……？

視界の隅に小さな違和感を感じ、その場所を凝視する。

「ねぇ、クーロちゃん」
「……何？」

あれ？　何か雰囲気が悪い様な？
ひょっとして自分の考えに自信があっただけにハズレたから怒っているのでしょうか？　そういう時って機嫌が悪くなりますよね。分かります。それなら尚更この事を教えないと。

「あのね、クーロちゃん。あそこなんだけど……」

さっきまで凝視していた所を指差す。

「……？　……！　あれって！？」

気付きましたね。クーロちゃん。

「それでは行きましょうか」

クーロちゃんを促し、あの場所へと歩を進めた。

「あの魔王様、何を見ているんですか？」

今居る場所は屋根の上。屋上から登り、魔王様の元までやって来ました。

「空を見てるんだ」

魔王様が空へと腕を伸ばし、天を突くかの様に指を差した。

「……空」

クーロちゃんの復唱と共に顔を空に向けた。

「綺麗……」

見上げた空は何処までも黒く、その果てのない黒の中に沢山の白く輝く星が散りばめられていた。

「魔王様、星が綺麗ですね」

満天の星空に感動した私は魔王様に同意を求めた。魔王様が頷い

てくれると信じて。でも、魔王様の言葉は私の予想したモノとは違った。

「何を言ってるんだ？　俺は星ではなく、空を見ていると言っただろ？」

……えぇ～っと、どういうことですか？

「……星空ではなく夜空全てを見ているってこと？」

クーロちゃんが小首を傾げながら訊ねる。

「あぁ、そうだ。月も星も全て含めて見ているんだ。あそこの星が無い場所だって見てるよ」

そう言って指差した方向に目を向けると確かに星が無く、周りよりも暗かった。

「……俺は昔から夜空が好きなんだ。月が淡く照らし、星達が光り輝く夜空も、新月で月が無い夜空も、曇っていて辺り一面真っ暗な夜空も好きなんだよ。まぁ、晴れてくれてる方が嬉しいけどな」

空を見上げたまま言葉を続ける魔王様。

「空自体好きだが、やっぱり夜空が一番好きなんだ。多くの生き物が眠り、静かになった夜。俺の名前でもある静かな夜、その空は月の淡い光が包み込む、儚くて優しい、それでいて残酷な静寂の空」

空へと指差した手を開き、まるで星達を掴むかの様に握る。

「たまにそんな空を見たくなるんだ」

握り拳を胸の前までもってくる。

「一人静かに夜空も見上げる。これは俺の習性だ。だから確りと覚えて、次からは慌てる事の無いようにな」

ニカッと笑い、私達に言う魔王様。

私達が探し回っていた事を知られていたことに恥ずかしさを感じました。

その27：これは面白そうなことになってきたのか？

「おいセイヤ、手紙が来てるぞ」
「手紙？　内容は？」
「『マーノ地区魔王に通達。ナマナルナ地区魔王城に来られたし。用件はナマナルナ地区魔王城会議室にて』だとさ」
「あー、アルセン。代わりに行ってきてくんねぇ？」
「魔王はお前だろ？」
「いや、だってまだこの世界の地理は知らねぇし。マーノ地区の地理を今現在勉強中なんだぞ？」
「いや、でもな……」
「それにお前だって外に行きたいんだろ？」
「……」
「場外に出てはいけないなんてルールは無いのに城から出ない。そのくせ偶に窓やベランダ等で外を見てる。そんなお前を見るのが鬱陶しくて堪らない」
「……」
「だからお前が行け。これは決定事項だ。異論反論は認めねぇ」

そんなやり取りがあり、我は今、ナマナルナ地区魔王城に来ている。

「お前がマーノの新しい魔王か？」

身長的な意味で我を見下してくる何処かの魔王。
いやいやいやいや、ないないない。こんな雑魚が魔王？　止

めてくれよ、魔王の格が下がるって。
「いや、我(オレ)は代理さ」
「フン。こんな代理を遣すとは、新しいマーノの魔王は凡愚なのか？」
笑わせてくれるな。相手どころか自分の力量(チカラ)すら分かってない奴が凡愚なんて言葉を使うとは。
セイヤが凡愚ならお前は存在価値すら無くなるぞ？
「ム？　貴様はアルセナイトか？」
雑魚の反対側から声を掛けられ、我(オレ)の事を知っている奴がこの時代に居るのか？　と思いつつ、何処かで聞いたことがあるような声を発した奴へと視線を移す。
そこには一人の老人が居た。そしてその老人は我(オレ)も知っている人物だった。
「久しぶりだな、ジジイ」
「口の悪さが直っておらんようじゃのう？　若造」
「お前だって同じだろうが」
「はて？　何の事やら？」
「まぁ、お前がしらばっくれて猫を被り続けようが我(オレ)には関係ないがな」
「ほっほ、確かにそうじゃのう。それより何故貴様が此処に居る？」
「マーノの魔王の代理だからさ」
「クック、永いこと封印されていたから身体が鈍って新しい魔王に負けて飼犬に墜ちよったか？　んん？」
「ハッ、飼犬になった覚えはねぇな。それに身体も鈍ってなんか無いぞ？」

「言いよるな、若造」
「なんならその身体で直に試してみるか？」
「儂に一度も勝った事無いくせに吠えるか」
「今は衰退期で後は死ぬだけの老骨（おまえ）と封印されていたお陰で未だ全盛期の我（オレ）。どちらに分が有るかは言わなくてもお前なら分かるだろ？」
「儂をそこいらの老骨だと思うなよ？」

周りの空気は張り詰め、我（オレ）とジジイの間で互いの溢れ出た魔力がぶつかり合う。

「クック、久しいのう。この緊張感」
「……」

お互いの魔力の錬度が高まり、一触即発の状況の中、それはいきなり起きた。

「おーいお前らー席に着けー」

扉が開き、姿を現した人物は大魔王の一人で最も面倒臭がりなアノ人だった。
あらゆるものをグダグダな雰囲気で覆い、張り詰めていた空気を弛緩させた。

「……命拾いしたのう？　若造」
「それはこっちの台詞だ」

どちらからともなく高めた魔力を霧散させ、戦意が無くなった事を表した。
そのまま互いに一瞥する事無く宛がわれた席に着く。

「さて、今日お前らに来てもらったのは今まで決まっていなかったセラルドフィ地区の魔王が決まったからだ。ほら、入って来い」

会議室の扉が開き、一人の男が入ってきた。

「皆さん初めまして、アルセウス＝セイグリットです。以後お見知りおきを」

丁寧に礼をした後、アルセウスは自分の席へと腰を下ろした。

見たところセイヤより少し年上か。漆黒の髪は腰の辺りまで伸びていて、それを一つに纏めているようだ。顔は一言で言うなら「優男」か。野郎の外見に興味は無いが、ヤツの魔力には驚いた。今の魔力を全く練っていない状態なのに魔力の質がとても良い。しかも魔力自体に様々な属性が宿っている。……コイツは間違い無く今の魔王達の頂点に立つ力量（チカラ）を持っている。いや、大魔王をも超えているか？　まぁ、取り合えず今の我（オレ）とセイヤの二人掛りでも分が悪い。

あぁ、さっき身体が鈍っていないと言ったがアレは嘘だ。鈍ってなかったらセイヤに負けることは無いから。でもあのジジイも我（オレ）が嘘を吐いているのは気づいているだろう。なんせあの老獪（ジジイ）だしな。

それにしても、

「……アルセウス＝セイグリットか。出来る限り敵に回したくないな」

さて、用件も終わったことだし、何か土産でも買って帰るか。

ジジイとアルセウス以外眼中に無い我（オレ）はさっさと城を後にした。

その２８：魔王の魔王による魔王のための覚書　～世界編～

さて、今回はこの世界について纏めるか……。

この世界は三つの大陸、十の地区から成り立っている。地区については魔物側の境界で、人間達は複数の国で分けているようだが、魔王城に人間の国について書かれた書物が無かったので割愛する。

三つある大陸は大きさが大、中、小に綺麗に分かれている。大きい順にファラレイ、エレスティア、セパ、と呼ばれている。ファラレイ大陸の西側にエレスティア大陸があり、ファラレイ大陸の南東にセパ大陸がある。

地区はファラレイ大陸に五つ、エレスティア大陸に三つ、セパ大陸に二つ、となっている。

地区の名前はレーマルベ、マーノ、ヨーヴィ、ナマナルナ、セラルドフィ、ケルボ、テトラトン、オネーヴィア、ホルセレス、ワーツと呼ばれている。

ファラレイ大陸にはレーマルベ、マーノ、ヨーヴィ、ナマナルナ、セラルドフィがあり、それぞれ順番に西部、南部、北部、中央部、東部に位置している。

エレスティア大陸にはオネーヴィア、ホルセレス、ワーツがあり、順番に南西部、北東部、南東部に位置している。

セパ大陸にはケルボ、テトラトンがあり、ケルボが西部、テトラトンが東部に位置している。

そして地区ごとに魔王城があり、大陸ごとに大魔王が居る。大魔王は城に住まず、自分の担当の大陸を巡回とは名ばかりの放浪して

いるので住所不定だそうだ。
魔物側から見た世界は三人の大魔王と十人の魔王によって成り立っている。
……アルセンの話によると魔王の一人と大魔王の一人は代わっていないそうだ。大魔王の残りの二人は見ていないから判らないらしいが。

次にこの魔王城があるマーノ地区について書いていくか。
ファラレイ大陸の南部に位置するマーノであるが、正確にはファラレイ大陸の南部～南東部がマーノ地区であり、大陸の南西部はレーマルベの管轄である。マーノ地区の地形は長方形だと思ってくれれば良い。接している地区はレーマルベ、ナマナルナ、セラルドフィの三地区。
地区の東部は森林地帯である。この森林地帯はセラルドフィにも広がっている。と言うよりセラルドフィは九割が森林地帯である。沿岸部のみ低地になっていて、そこに人間が住んでいるらしい。森林地帯に人間は住んでいない。
地区の西部は荒野になっている。所々に緑があるが、そこには人間が住んでいる。
ナマナルナは山に囲まれた地区である。というかナマナルナと他の地区の境に山脈が連なっている。なのでマーノ地区の北部は山岳地帯である。この山岳地帯に人間は住んでいない。
マーノの魔王城は山岳地帯と森林地帯と荒野の境目辺りに建っている。

魔物についても書いておくか……
この世界での魔物の定義は『魔に属するモノ』である。簡単に言えば魔族、魔獣の総称。魔族も魔獣も「魔物」の一言で片付けられる。
魔獣とは魔に犯されたケモノ達のことである。強い魔力を浴びた

り（魔力が多く籠められた魔法を喰らう訳ではない）、少量でも長い期間体に取り込んだりすると魔獣になるようである。動物達同様、魔獣同士で生殖して増えることも可能である。魔獣は下級、中級、上級に分けられている。一部の魔獣――大体は強い力を持つ魔獣――はヒトの姿に化けることが出来る。殆どの魔獣は魔族よりも劣っている為、魔族には従順である。

魔族は元からヒトの姿をしているモノ達で、基本的に魔獣より強い力を持っている。だが、上級魔獣の中には最強クラスの魔族に匹敵する力を持つものが居るので魔族が魔獣に従う姿が数件確認されている。魔族は魔獣と違い人間から魔族になる事は無く、魔族同士の生殖行為でのみ繁殖する。因みにティア達は魔族である。ついでにこの魔王城の召喚魔法でこの世界に来た人達――俺や光等――は召喚魔法の効果でこの世界に来た時に魔族になったらしい。体に変化は何も感じられないから判らないが……

森林地帯の魔獣は大人しいモノが多く生息している。荒野は獰猛な魔獣が多いが、それほど強くは無いので人間達と喰いつ喰われつで均衡が保たれている。山岳地帯は中級以上の魔獣しか生息していない上に力の強いモノが多い。更に攻撃的な魔獣しか居ないので多少力のある人間でも太刀打ち出来ずに喰われている。

……大体こんなもんかな？

まぁ、世界について書いてみたが、地理はマーノ九割と隣接している地区一割程度の割合で話が済むから無駄知識が多いけどな……

ひょっとしたら別の物語が他の地区で紡がれるかもな。

その29：いらっしゃいませ、魔王様

「む」

リファと一緒に鍛錬している――拉致られて無理矢理リファの鍛錬に付き合わされている――と偶々近くを通ったアルセンが何かを感じたようだった。

「どうした？　アルセン。何かあったのか？」

「どうやらお前に客のようだぞ。セイヤ」

それだけを言うと踵を返して歩を進めていくアルセン。俺に「お前もさっさと戻れ」と視線で言ってきやがった。

俺に客とな？　はて？　この世界で知り合いなんてこの城にしか居ない筈なんだけど？

誰が訪ねて着たのか分からないまま俺は玉座まで足早に移動した。

「初めまして、アルセウス＝セイグリットです。以後お見知りおきを」

「初めまして、月闇静夜です。こちらこそヨロシク」

玉座で待っているとティアに案内されて俺と同じ位の少年と少女が現れた。

少年は確りと俺を見据えて礼儀正しく挨拶をしてきた。

いやぁ～、アルセウスにつられて初めて礼儀正しく挨拶してしまったな。

……取り敢えずそんな事は置いといて。

「で、この城に何の用だ？」

少し高圧的に問いただす。アルセンからコイツはヤバイ奴って聞いてるから内心ビックビクだけどな。

「特に用は無いですよ。いえ、貴方に会うのが用でしょうか。ナマナルナに来ていたのは代理の者だと聞いたので」

「別に会わなくても問題無いだろ？　何で来たんだ？」

ティアに話を聞いたが、魔王が他の地区に行く事は滅多に無いらしい。あるとすれば殺し合いが主だって話だ。「お前が嫌いだから殺す」みたいな感じ。

「唯の好奇心ですよ。隣の魔王はどんな魔王なのかを知りたいだけです。それに隣でなければ会いに行く事なんてしませんよ」

嘘は言ってないか……

「そうか。正直に話すとアルセンから聞いてから俺もお前に興味があったからいいけどな。……それよりお前の僕の態度が余りよろしく無いように見えるが」

そうなのだ。この部屋に入ってきた時からアルセウスの隣に立っている銀髪の犬耳娘が俺をずっと睨んでいるのだ。いや、睨んでいると言うより何時でも俺を攻撃出来るようにしているのだ。

「エリス、止めなさい。貴女では勝てません。それに闘う必要はありません」

「ですが！」

「エリス」

名前を呼ぶだけだが、身内であるのにも関わらず容赦無く威圧する。

エリスとやらは身体を一度大きく震わせ、アルセウスを見た。

「……すみません」

「分かってくれたのならいいですよ」

アルセウスはエリスの頭を撫で、その後に俺に視線を戻した。

「申し訳ありません。ですがエリスは僕ではなく、私の友達です」

「それは悪かった。以後気を付けよう」

ヤバイよアイツ。目がマジなんだけど。簡単に訳して「次言ったらブッ殺す」って目で言ってるよ。

……それにしても見れば見る程強そうだな。別に俺は戦闘狂ではないが闘ってみたいな。俺自身の強さ、コイツとの差、世界の広さ、それらを知る為に。

「それで、用件は終わりか？　終わりなら――――」

徐に玉座から立ち上がり、間を詰めていく。

「――――一戦やろうぜ」

魔力を右の拳に集めて殴りかかった。

その３０：魔力パネェッス、隣の魔王様

アルセウスは俺の攻撃を難なくかわし、間合いをあけた。

「分かりました。お相手致します」

そのまま右手を俺に翳す。

「『“デスブリット”』」

おいおいおい！？　即死効果のある魔法とか止めてくれよ！！

急いで右手を動かす。

「『“フレイムクリフ”』！！」

炎の壁を作り出す。が、デスブリットはそれを喰い尽くしてなお、止まらなかった。

本当は避けるべきなのだが、今俺の後ろにはティア達が居るので避ける訳にはいかない。……多分皆避けれるから俺が避けても大丈夫な気がするけど。

「『“アクアケージ”』！」

本来は対象を中心に水球を展開するのだが、今回は俺とデスブリットの間に展開する。

炎の壁（フレイムクリフ）を喰い尽くしていた死の弾丸（デスブリット）は水球の檻（アクアケージ）を喰って消滅した。

「いきなり即死魔法とか容赦無いな」

「今回の目的は互いの実力を見極めることです。その為、探り合い

なんてまどろっこしいことをするよりも最初から本気を出させた方が早いでしょう。なら相手に本気を出して貰うには此方が本気を出すのが手っ取り早い訳です。」
「成程ね。なぁ、一つ提案があるんだが……」
「何でしょう？」
「此処は狭いだろ？　だから場所を中庭に移したいんだけど……」
「いいですよ」

そして舞台は中庭に。

「仕切り直しついでにもう一つ提案があるんだが、次の一撃で終わりにしようぜ。この闘いは互いの力量を知る為の闘いなんだしさ」
「そうですね。では、手加減無しの本気でいきます」

魔力マジパネェ！！　死ぬ！　軽く死ねる！！
アルセウスの魔力が有り得ないくらい高まっている。あれだけの魔力ならしょぼい魔法でも人殺せるよ。
流石に俺が言い出しっぺだし退く訳にはいかないので、出来る限りの事はしよう。
右手はダークブレイズを、左手はバーンブラストを。口は合わせる為の詞を紡ぐ。

「『闇の炎は破壊の炎。不可視の爆風すらも焼き尽くす。漆黒の炎は破壊の限りを尽くし、黒炎の爆風は破壊の道を指し示す。』」

アルセウスは両手を前に突き出し、歌うように詠唱している。

「『“黒奏・ナイトメアオラトリオ”』」
「『“ブラックブレイズブラスト”』ォォォォ！！」

アルセウスの魔法が一瞬早く発動した。
てゆーか黒奏(くろかなで)って名前かっけーな、おい。オリジナルですか？
どんなに凄いんですか、貴方は。
前へと突き出した手から人の上にもう一人乗せても飲み込める程の直径の漆黒の炎が全てを飲み込もうと直進し、同じ位の大きさの闇色のビームと拮抗している。多分、ゲームならボタンを連打する場面だな。
余裕を持って解説している様に見えるかも知れないが、実際は心の中でヒィヒィ言って、追い詰められてるよ。解説なんて現実逃避してるだけさ。

どれ位時間が経ったのかは判らないが、そろそろ魔力が切れそうッス。……くそー、アルセウスめ。自分だけ涼しい顔しやがって。あの顔に一発ブチ込みたいなぁ。

漆黒の炎が勢いを無くし、徐々に小さくなっていく。……やば、現実逃避ももう限界か。魔力が無くなったわ。という訳で俺は今からビームに飲み込まれます。今まで読んでくれてありがとう。俺の物語(はなし)はこれで終わりだ。次はアルセウスが主役の物語(はなし)が始まるよー。皆、じゃあな！！

「あれ？」

目を開けると視界（そこ）には最近見慣れてきた天井が。

「あ、起きましたか？　魔王様」

ティアの声が聞こえる。

「あれ？　俺……あれ？」

上体を起こして思考する。記憶を遡ったが、『じゃあな！！』辺りから先の記憶が無い。

「どうかしましたか？」

水の入ったグラスを手渡しながら訊ねられた。
グラスを受け取り、喉を潤してから口を開いた。
「あの後どうなったんだ？」
ティアはそれだけを聞いて、俺の知りたい事を全て教えてくれた。
両者の魔法がほぼ同時に消滅し、アルセウスと俺は二言三言話し、アルセウスはエリスと共に帰った。
そして俺はさっさと部屋へと戻りそのまま寝た様だ。
……アルセウスと話した二言三言を思い出さないと何時かヤバい目に遭いそうじゃね？
その疑問が頭の中の殆んどを占めた。が、一向に思い出せなかった。

その31：もうヤダ。何この妹

「……」
「……うぅん」
「……」
「……お兄ぃちゃん」
「……」
「……えへへ」
「……」
「……あ、ダメだよ」
「……」
「……もう、お兄ちゃんのエッチ」
「……」
「……だ、ダメ！　そんなトコ触っちゃ！」
「……」
「……あ、やっ、ダメェ」
「……」
「……そ、そこは……あぁん」
「……」
「……お兄ちゃんなら……いいよ」
「……」
「ん、あ、お兄ちゃんのが挿（は）――――ブツン！！

「……なぁ」
「……何？」
「コイツ一回ブッ飛ばしてきて良いよな？」
「……やっても意味無いと思うけど」
「だよなぁ」

クーがなんとなく創り上げた新しい魔法の実験の結果を一緒に見ていたんだが、クーが対象に選んだのが光だった。そして明らかに人選ミスだった訳だ。

「で、結局どんな魔法なんだ？　その新しい魔法は。……まぁ大体の予想ってか答えは判ってるけど」

クーが「……新しく創った魔法の実験結果を一緒に見よう」と誘ってきたから着いてきたが、今までどんな魔法なのかを教えて貰っていなかった。だけどさっきも言ったが、大体どんな魔法なのか判った。

「何処かに設置して、一定時間の映像と音声を記録して後で記録した物を見ることが出来る魔法。こんな感じだろ？」

要するに防犯カメラ的な魔法。

「……うん。良く判ったね」

現代っ子をナメんなよ。防犯カメラが怖くて悪戯出来るかってんだ。

「元の世界に殆んど同じ様な物が在ったんだよ。勿論魔法じゃないぞ」

「……そうなんだ」

あら？　余り興味がおありでないご様子で。

「で、録ったこの映像はどうするんだ？」

ただ単純に気になった事を聞いただけだ。だが、クーは何を勘違いしたのか、

「……ひょっとして欲しいの？」

と、変に間を空けてから答えた。

声を大にして高らかに宣言しよう。

「要らねぇよ！！」

何で血の繋がってる妹のヤバい姿の動画を欲しがらにゃあいかんのだ？

俺はシスコンじゃない――百歩譲ってシスコンだったとしても、妹を性的対象として見たことは一度足りとも無い――から、兄に嬉々として襲われてる夢を見ている妹のイタい寝言を延々と聞かされたくねぇよ。

……あのクネクネ具合が更に腹立たせてくれる。多分あの場に居たら腹に思いっきり膝をブチ込んでると思う。

「……どうするの？」

「……何が？」

「……解ってる癖に」

いや、解ってるんだけどね。正直訊いて欲しく無かったよ。

「あー、えっと、その……まぁ、そうだな……。うん、何もしない。したくない。今すぐこの事を忘れたいから外の空気吸ってくる」

そうして俺は逃げ出した。

その３１：もうヤダ。何この妹（後書き）

勇者を滅殺するとか、元の世界に戻るとか、神々と戦うといった目的がないから話が思い浮かばない。ｏｒｚ

どうしよう？　終わらせ方も思い付かないから終われない。でも、個人的にはまだ終わらせたくないんでヒィヒィ言いながら頑張ろうと思います。

あれ？　作文んんん！！？

その32：〇〇角、同飛、同桂

「えい、角取った！」
「その飛車、（桂馬で）貰い受ける！！」
「えぇっ！？　ま、待って！　待ってよお兄ちゃん！！」
「戦争に待ったなんて無い！」
「……お兄ちゃんのイジワル」
「フッ、何とでも言うがいい。戦争に待ったもクソもないだろう」
「お兄ちゃんの卑怯者！」
「何が卑怯だ？　戦争とは常に無情なものだ。相手に勝つ為に幾重にも罠を張り、謀略で惑わせ、策略で陥れ、力で捩じ伏せる。そして、それらを実行するには卑怯で残忍で狡猾で非道でなくてはならない」
「……バーカ」

光（こいつ）、俺の話を聞いてないな。人の話はしっかり聞けと言ってるのに。

俺達は今将棋で遊んでいる。

テレビ、マンガ、ゲーム、ネット等が無いこの世界は余りにも暇過ぎる。そこで俺は将棋盤と駒を作ることにした。何故将棋なのか？　と聞かれたら偶々頭に浮かんだのが将棋だっただけだ。という訳で木を切り倒し、記憶を頼りに駒と盤を作ってみた。因みに盤は折り畳み式。

昨日の夜にお粗末ながらも完成したので実際に遊んでみることにした。

「あ」

あらら～、これはやっちゃたんじゃね？

「どうしたの？」

光が何事かと訊ねてくる。どうやって飛車を取り戻そうかと必死に考えている光は前傾姿勢になっている。その為、俺を見上げる形になり、視線も上目遣いになる。

光は兄としての贔屓目抜きにしても可愛いと思うし、何処から手に入れたのかは判らないが明らかに身体よりも大きいYシャツを着ていて、尚且つ一番上のボタンを留めていないからその隙間から可愛らしい下着が見え隠れしてるのがドキドキするな。

もし光と血が繋がってなかったら多分恋人同士になってると思うし、あんな事やこんな事、そんな事までしているのかもしれない。

もし光のブラコンがお兄ちゃんにちょっと甘える程度の軽いブラコンだったら俺ももう少しシスコンになってたと思う。

まぁ、何が言いたいかと言うと、どれ程俺に対して変態的でも美少女である光に兄妹とはいえ好きと言われるのは嬉しいし、やっぱり可愛い妹であることには変わらないので、『お兄さん、光さんを僕に下さい！』って言われたら取り敢えず問答無用で一発殴り、『光が欲しければ俺を越えてみろ！』って言ってしまいそうだということだ。

いやもう自分でも何を言ってるのか分からなくなってるよ。

「……いや、ちょっと腹が痛くなってきただけだ」

「大丈夫？　お兄ちゃん」

「ちょっとトイレ行ってくるわ。ティア、俺の代わりに光の相手してやってくれ」

「え？　私がですか？」

この部屋には俺と光とティアしか居ないのに何故そこまで驚く？

「やり方は見てたろ？　駒の動かし方も大体解ったと思ったんだけど」
「確かにある程度は理解しましたが、私がすると負けてしまうかもしれませんよ？」
「あぁ、そのことは別にいいよ。遊びなんだから勝ち負けは気にすんな。じゃあ、任せたから」

返事を待たずに部屋を出た。

「さて、行きますか……」

俺はそう呟いた後、トイレとは反対側に歩き出した。

その３３：禁断の聖域への片道切符

「よく来たな」

俺の前に現れたのは見たことのない男だった。

身長は１８０位だろうか？　まぁ、取り敢えず俺より高い。服装は……此処に来る前に一戦やったのだろう、所々破けており、皮膚が見えている。比較的綺麗な皮膚を見る限り、破けている箇所に怪我をしたが、此処に来るまでに治ったのだろう。……服の至るところが血を吸って変色してるし、正直さっさと何処かへ行って欲しい。

「で、俺に何の用だ？　そんな格好で来る程だ、急ぎの用でもあるんだろ？」

早く用件を言ってさっさと此処から立ち去れ。と言外に伝える。

「……俺に手を貸せ」

……はぁ。

「……理由を聞こうか」

頬杖をついて促す。

「俺はアルセウスをブッ殺したいんだよ！」

「なら一人で殺れよ」

「だが一人だと出来なかった。だから貴様の力を借りに来てやったのだ。感謝しろ」

……面倒臭ぇ。

「……お前の間違いそのいち」

玉座から立ち上がる。

「人に物事を頼む時は下手に出ろ」

一歩踏み出す。

「間違いそのに」

着実に男との間合いを詰めていく。

「相手どころか自分の力量すら測れない奴が調子に乗るな」

右手を動かし魔法を何時でも発動出来る様にしておく。

「間違いそのさん」

男の前で立ち止まる。

「残念ながら俺はアルセウスの友人だ。向こうがどう思ってるのかは知らないが、少なくとも俺がそう思ってるから友人だ」

男の真正面に右手を翳す。

「雑魚が高望みし過ぎなんだよ。俺にすら勝てない奴がアルセウスに勝てる訳無いだろ。馬鹿な夢見て地獄へ堕ちろ」

魔力が体から抜けていく。

「『“フォビドゥンサンクチュアリ”』」

男の姿が一瞬にして消えた。

「ふぅ……」

やっぱりアレだな。闇属性の魔法は癖があるな。威力や効果は高いけど、その分消費魔力は多いし、何かと制約があるし……。もうちょっと闇と光以外の属性を練習するか。それに新しい合成魔法を編み出す為の切っ掛けになるかもしれないし。

「さて、光とティアの対局はどうなったかな？」

部屋へと歩を進めた。

“フォビドゥンサンクチュアリ”は対象者をとある場所へと送りつける魔法。

その場所は“フォビドゥンサンクチュアリ”以外は如何なる方法をもってしても辿り着くことの無い世界から隔絶された場所。そしてどんな手段を用いても二度と外へと出れない場所。

更にその場所ではあらゆる魔法を使う事が出来ない。多分そういう効果を持つ結界か何かが張られているのだろう。推測なのはその場所から帰って来れた者は誰一人として居らず、確かめることなんて出来ないからだ。

簡単に言えば相手を二度と外へ出ることの叶わない牢獄へブチ込む魔法。

“フォビドゥンサンクチュアリ”で何処に飛ばされるんだろ？
後、どんな所なんだろうな？
興味が湧くけど戻って来られないなら行けないし……。
……無駄な思考は止めて今から何をするか考えるか。
取り敢えずはもう一度光と始めから対局しようかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5546h/

魔王って何ですか？

2011年10月5日02時54分発行